ISSN 2187−820X

福井県立歴史博物館紀要

特　別　号

BULLETIN
OF
THE FUKUI PREFECTURAL MUSEUM OF CULTURAL HISTORY

SPECIAL ISSUE

２０２２年

福 井 県 立 歴 史 博 物 館
FUKUI PREFECTURAL MUSEUM OF CULTURAL HISTORY

目　　次

大 河 内 勇 介：
戦国時代の真柄氏　―真柄氏家記覚書の紹介―　…… 1

＊真柄氏家記覚書の写真と翻刻　…… 30

CONTENTS

OKOCHI Yusuke:
The Magara Clan in the Age of Civil War Era. 1

＊ Photographs and Transcription of Historical Materials 30

戦国時代の真柄氏　―真柄氏家記覚書の紹介―

大河内勇介

はじめに

ここに紹介する真柄氏家記覚書（以下、覚書）は、福井県立歴史博物館が令和二年（二〇二〇）度に購入した資料である。これまで全く知られておらず、中世の真柄荘（現、越前市上真柄町・真柄町一帯）に住した真柄氏の歴史を解明するうえで極めて重要な資料となる。それゆえ、紹介の機会をいただいたわけである。

従来、真柄氏と言えば、越前朝倉氏の家臣である真柄十郎左衛門が非常に有名である。戦国随一の豪傑とも言われる、彼の合戦での活躍は、後世の記録類や講談によって人口に膾炙している(1)。しかし、実は、彼に関する良質な一次資料（その当時に記された資料）は知られていない。また、他の真柄一族についても一次資料はごくわずかであり、真柄氏の実態は謎に包まれたままである。

とはいえ、真柄氏に関する研究がないわけではない。現状、最も詳しいのは松原信之氏の研究(2)であり、その内容について、一次資料を中心に紹介すると、以下のようになる。

まず、貞治六年（一三六七）十月十七日付の越前守護畠山義深請文(3)を挙げ、真柄荘では真柄左衛門大夫が朝倉高景の預状を持つと主張して越前守護に反抗しており、南北朝時代に真柄氏が朝倉氏に与していたとする。

次に、正月十三日付の真柄左馬助景忠起請文(4)を挙げるとともに、永禄十一年（一五六八）の室町幕府十五代将軍足利義昭による朝倉義景亭御成の際に作成されたと考えられる朝倉義景亭御成記(5)には、先述の真柄左馬助（景忠）と真柄備中守が見えるとする。また、朝倉始末記(6)も挙げ、御成の直前に義景が義昭を南陽寺に招いた際、真柄十郎左衛門父子が大太刀と武術を披露したという有名な話を紹介したうえで、十郎左衛門父子は景忠の庶家と推定する。これは景忠が義景の偏諱「景」を賜ったことからの推定であろう。なお、朝倉始末記については、原本は天正七年（一五七九）の成立であるが焼失し、加筆増補が行われた文久三年（一八六三）の書写本を底本にしているため、現状では、十郎左衛門父子のエピソードが原本成立当初に存在したか否かは不明である。この十郎左衛門父子が元亀元年（一五七〇）の姉川合戦で討死したことは、当代記（寛永年間（一六二四～四五）成立）(7)などの後世の記録類に見えるとする。

次いで、天正十一年（一五八三）八月四日付の丹羽長秀領知宛行状(8)を挙げ、宛先の真柄加介の存在から、朝倉氏滅亡後も真柄氏の一流は存続したと推定する。

その他、越前市大屋町にある穴地蔵古墳の石壁に「越前国今南西郡於大屋庄、願主真柄民部丞光家、于時明応拾年（一五〇一）六月廿四日、乙酉歳参拾六」（引用文の（　）も筆者の補注であ

る）[9]とあり、戦国時代に真柄氏の一族が大屋荘一帯に土着していたことを紹介する。

このように、断片的に残る一次資料からは、南北朝時代の真柄左衛門大夫をはじめ、戦国時代の左馬助景忠・備中守・加介・民部丞光家を確認でき、後世の記録類を含めると、十郎左衛門父子も確認できるのである。松原氏の研究は、景忠を真柄氏の嫡流と推定した点など、巷間に流布する十郎左衛門父子に関する叙述とは一線を画すと評価できるが、依然として真柄氏の全体像が不明である点に課題が残っている。

そうした研究状況のなか、今回、真柄氏に関する新出の資料である覚書が発見された。覚書は、簡単に言うと、戦国時代における真柄氏歴代の動向を記したもので、これまで不鮮明であった真柄氏の系譜関係（嫡流・庶流など）や、十郎左衛門の経歴、十郎左衛門が使用したことで有名な大太刀の実態など、多くの謎を解き明かしうる資料となる。この覚書の検討に加え、今回、真柄氏関連資料を改めて収集したことで、戦国時代における真柄氏の全体像が次第に見えてきたように思う。

そこで次に、覚書の内容を紹介したいのであるが、その前に、覚書がいかなる伝来・性格の資料かという基礎的な点を押さえておく必要があろう。やや迂遠となるが、その点から述べていく。

一、真柄氏家記覚書と田代家

覚書は田代家文書という約九十点の文書群に含まれる[10]。これらを伝えた田代家は、戦国時代に医聖と称された田代三喜（曲直瀬道三の師）の流れを汲み、福井藩三代藩主の松平忠昌以降、代々、福井藩に医家として仕え、明治時代には福井済世会（福井市医師会の前身）の副会長を輩出した家である。

この福井藩田代家に真柄氏関連資料がなぜ伝来したのかというと、家祖の田代養仙なる人物が真柄氏出身とされるからである。田代家文書の田代家系図（貞享五年（一六八八）～享保九年（一七二四）成立）によれば、養仙は永禄十二年（一五六九）に越前真柄村で生まれ、もとは真柄氏で、若年より美濃に住み、医者修行のために東国・西国・南蛮国などを行遊した。その後、元和六年（一六二〇）五十二歳の時、江戸に行き、田代三喜の子孫である田代大膳（養元）と子弟の契約を交わし、田代の医家を相続し、家伝書などを譲られた。実際、田代家には神仙解毒万病円なる家伝書が伝来する。その後、元和八年に越後高田藩主の松平忠昌に仕え、二百石を賜った。これを証する同年十月日付の松平忠昌知行宛行状も残っている。次いで、越前福井藩を継承した忠昌に従って福井に住した。田代家文書には寛永二年（一六二五）三月日付の松平忠昌知行宛行状があり、吉田郡東今泉村内の百石と今南西郡上真柄村内の百石を賜ったことが分かる。ここに至り、養仙は自身の故郷である上真柄村に知行を持つことになったので

ある。その後、慶安二年（一六四九）八十一歳の時、福井城下の中ノ馬場屋敷で死去し、泰清院に埋葬された。松平文庫蔵（福井県文書館保管）の御城下絵図（寛文年間（一六六一～七三）成立）には養仙の中ノ馬場屋敷が記されている。また、泰清院には五輪塔の墓が現存している[11]。なお、養仙はキリシタンとしても有名であったらしい[12]。

この真柄氏出身の養仙の嫡男、養山が覚書の作者である。先述の田代家系図によれば、養山は慶長十八年（一六一三）に福井で生まれた。養仙四十五歳の時の子どもである。性質は明敏にして、若年より好学で、常に勤学を怠ることはなかった。当時の名医である寿徳院（曲直瀬）玄由法印などに師事し、医学を究めた。また、儒教・仏教の修練に励み、能書家でもあった。福井藩主の松平光通・綱昌・昌明の三代に仕え、三百石を賜った。田代家には、これを証する承応二年（一六五三）十二月日付の松平光通知行宛行状や万治三年（一六六〇）六月日付の松平光通知行宛行状が残る。その後、田代家文書の享保六年（一七二一）付の田代養元・養哲由緒書によれば、元禄十年（一六九七）八十五歳の時、福井で病死したとある。

なお、養仙・養山の名前は、福井藩の先祖由緒書集である諸士先祖之記（享保六年（一七二一）成立）[13]でも確認できる。

ここで覚書の話に戻すと、奥書には「田代養山斎（黒印）」とあり、作者は養山と分かる。成立年代は不明であるが、養山が死去した元禄十年（一六九七）以前の成立で間違いない。さらに、奥書のあとに一紙を継ぎ、「右真柄氏家記覚書一巻者即庵翁聞覚書記自筆也、野治汝謙[14]朝倉記集譔之時右之内書入也、道皐」という識語がある。これを記した道皐なる人物は不明であるが、田代家では「養」とともに「道」も通字としたことから、田代家の人物と見られる。この道皐によれば、覚書は庵翁（養山）が聞き覚えていたことを書き記したもので、自筆であるという。ちなみに、この識語にもとづいて真柄氏家記覚書という資料名を付与している。ともあれ、覚書は、江戸時代前期に、真柄氏の血を引く養山が真柄氏に関して聞き覚えていたことを自筆で記したものと言える。よって、一次資料ではないのであるが、次にその作成経緯を検討し、覚書の性格をより明確にしていこう。

養山は父の養仙はもとより、複数の人物から話を聞いたようである。たとえば、寛永の初め頃、策庵という歳八十頃の痩せた老人が涙を流して話したのを聞いたという。この策庵は朝倉義景の同朋衆で、二十七歳の時に義景最期の直前まで側で仕え、養仙の父に当たる真柄左近家重とも昵懇で真柄屋敷によく訪れており、朝倉氏滅亡後は、福井城下の松本町の娘の屋敷に居候し、折々、養仙のもとへ来て話をしたという。また、同じく寛永の初め頃には、一乗谷の繁栄をよく知る老人達が寄り合って互いに涙を流して話した昔話を聞いたという。先述したように、養仙は寛永二年（一六二五）に越後高田から越前福井に来て、福井城下の中ノ馬場屋敷に住し、上真柄村を知行しており、加えて覚書によれば、真柄氏の故地にある氏神の熊野新宮権現（現、越前市真柄町の新

宮神社）の再興に力を尽くし、自身が真柄氏出身であることを強く意識していた。そうした養仙のもとへ朝倉氏旧臣が訪れ、寄り合って昔話に花を咲かせたのであろう。養山は、その話を養仙の側で聞いた（もしくは、養仙から聞かされた）と考えられる。

また、養山は、寛永年間（一六二四～四五）には、福井城下の神明寿福院から話を聞いたという。その話は、神明寿福院の父が朝倉景鏡の小姓を務めており、景鏡邸の座敷で見たと常々語っていた話という。

さらに興味深いのは、養山が匂（向とも）坂式部なる者から話を聞いたという点である。式部は遠江の匂坂氏の一族で、徳川家康の家臣として姉川合戦に参加し、前述した当代記などで真柄十郎左衛門を討ち取ったとされる人物である。従来、式部の姉川合戦以降の経歴については、姉川合戦で死亡したとか[15]、武田勝頼に同調して追放されたとか[16]言われ、詳細不明であったが、覚書に「此式部後ニ黄門秀康卿召テ住宅ス」とあり、結城秀康に仕えて福井城下に住んでいたようである。実際、源秀康公御家中給帳・忠直公御家中給帳（いずれも元禄十七年（一七〇四）以前に成立）[17]では、遠江出身の向（鷺とも）坂式部が御馬廻衆として五百石を賜っており、慶長八（一六〇三）～十七年頃を描いた越前国北之庄御城下古図[18]や慶長十八年頃を描いた北之庄城郭図[19]では、毛矢町にその屋敷が存在したと判明するのである。すなわち、養山は自分の先祖に当たる真柄十郎左衛門を討ち取ったとされる式部の話を聞いており、いわば当事者の証言を入手していたことになる。

このように、覚書は、朝倉氏の栄華を直に体験していた朝倉氏旧臣や、真柄十郎左衛門を討ち取ったとされる本人を情報源としており、全く根も葉もない作り話とまでは言えないであろう。

また、覚書の情報源となる人物の素性を明記し、根拠を示そうとする作者の姿勢も見逃すべきではない。これに関連して、覚書に「信長記ニ十郎左衛門尉ト記タルコトハ」とあるように、養山は、覚書の内容からすれば少なくとも甫庵信長記（慶長九年（一六〇四）～元和八年（一六二二）成立）[20]を参照しており、過去の記録の誤りを訂正しようとする作者の姿勢も確認できるのである。

以上、覚書の作者の系譜や製作姿勢、情報源の性質などを踏まえると、覚書は、一次資料ではないからと言って、簡単に切り捨てるべきではない。むしろ、その他の真柄氏関連資料を含めて総合的かつ慎重に検討し、活用することが重要であろう。そして、結論を先取りして言えば、覚書は、若干の記憶違い・誇張・作為があるものの、基本的には既知の歴史的事象と矛盾しないうえ、断片的に知られる真柄氏関連一次資料と符合することから、ある程度信頼のおけるものと評価できると思う。

覚書の基本的な性格を押さえたうえで、次から、その内容を詳しく見ていこう。

二、戦国時代における真柄氏歴代の事績

ここでは、覚書の内容について、朝倉氏や織田氏の記述を省き、真柄氏歴代の事績に絞って時代順に紹介する。覚書に記される人名や事績の年代は適宜比定している。事績に関連する他資料や補足すべき点がある場合は、参考として記載している。大太刀に関する事績のみ、紹介・考察は第三章に譲る。なお、覚書から分かる真柄氏の系図と、真柄氏の屋敷跡との伝承が残る場所を示した地図を本文末尾に掲げておく。

真柄家次　兵庫助

真柄氏は代々、越前真柄荘に館を構え、子孫相続して居住し、家次に至ったとされる。家次から詳しい記述が始まることからすると、彼は真柄氏中興の祖と言うべき人物なのかもしれない。

家次は兵庫助と称し、文明年間（一四六九～八七）に朝倉孝景（英林）が将軍足利義政の命を受けて甲斐氏・二宮氏や北陸道の凶徒を征伐し越前を平定していった際、孝景の幕下に属し、先陣として軍功を挙げた。これにより、真柄氏は朝倉氏を烏帽子親とし、一字（偏諱「景」）を賜り、真柄殿と呼ばれた。氏神は熊野新宮権現で、真柄館の南山に勧請されており、家次が社頭を再興し、のちに子孫の田代養仙も復興に力を尽くしたとされる。

《参考》

●真柄殿という呼称

戦国時代に作成された大瀧寺寺庫収納田数帳（大滝神社文書）[21]には、「真柄殿」が他の朝倉氏家臣らとともに見える。戦国時代の真柄氏は、在地では「殿」の敬称を付されて呼ばれており、在地領主・地侍クラスの存在で、朝倉氏家臣であったことが分かる。

●朝倉氏家臣の真柄兵庫

朝倉始末記の異本である朝倉盛衰記（享保四年（一七一九）頃成立）[22]の「朝倉家士座列并素姓之事」には、「真柄兵庫」とある。

●真柄兵庫の屋敷跡

越前国之図・越前地理指南（いずれも貞享二年（一六八五）成立）[23]には、「上真柄村　真柄兵庫屋鋪跡アリ」とあり、朝倉盛衰記の「朝倉家士住居之事」にも、「今南西郡　一、上真柄　真柄兵庫」とある。

●氏神の熊野新宮権現

熊野新宮権現を祀る新宮神社の明治四十年（一九〇七）の由緒書には、「朝倉氏の臣真柄十郎左衛門、此地に参万石を領し居住せし時は、氏神として崇敬厚く数多の社殿を改築し、神田を寄附し、隆盛の大社たりしも、朝倉氏滅亡の後、天正年中の兵燹に罹

り、社頭回録せり、然りと雖も今尚礎石等現存し、往昔隆盛の大社たりし一班を知るに足れり、目下各字に氏神を設け漸く離散すと雖も、下真柄、上真柄、西尾、宮谷等の産土神にして、社殿営繕等は往古より賦担し祭祀を合ふす」[24]とある。ここでは、世上有名な真柄十郎左衛門となっているが、真柄氏が新宮神社の社殿を改築したとの伝承が残る。

真柄家宗　出羽守

家宗は家次の次男で、出羽守と称した。剛強な体躯で、武者修行のために諸国を廻った。はじめは周防大内氏に仕えたが、朝倉氏より丁重な使者が派遣されたため、朝倉氏に仕え、宅良谷（現、南越前町宅良）を恩賞として賜ったとされる。家次の嫡男に関する記述がなく、その嫡男が早世したとも考えられるため、次男の家宗が越前へ戻り、真柄家を相続したのかもしれない。

長享元年（一四八七）、将軍足利義尚による六角氏征伐の際、朝倉貞景が家宗を先鋒として一万余騎を引率して近江坂本に陣を張り、家宗は八尺の大太刀を持って敵陣を截り（断ち切り）破り、諸軍の目を驚かし、将軍の御感状に預かった。永正年間（一五〇四～二一）に、将軍が再び六角氏征伐のために近江へ出陣し、朝倉孝景も軍勢を率いて出陣した際、家宗は手柄を立て、孝景から感状をもらった。これらの合戦を通じて、真柄の勇力が天下に鳴り響き、坂本の児童の諺（ことわざ）に「先陣真柄、太刀振真柄」と云うのは、家宗を指した。真柄氏の「野太刀ノ兵法」はここから始まったとされる。

《参考》

●将軍による六角氏征伐

長享元年（一四八七）の将軍足利義尚による第一次六角氏征伐では、当時の記録である蔭涼軒日録[25]などによれば、義尚が近江坂本に着陣した際、朝倉貞景が敦賀まで出陣し、敦賀郡司の朝倉景冬が騎兵百四十二騎・兵千四～五百人を従えて坂本に着陣したとある。家次は景冬軍の一角として参陣した可能性がある。覚書に記される朝倉軍の兵数一万余騎や家次の大太刀八尺などの数値の多くは誇張であろう[26]。

一方、覚書の永正年間（一五〇四～二一）の記述は、第二次六角氏征伐を指すとすれば、延徳三年（一四九一）の将軍足利義材によるものとなる。しかし、当時の朝倉氏当主は孝景ではなく貞景であり、貞景は斯波氏と相論していたため、この征伐には参陣していない[27]。また、永正年間に将軍による六角氏征伐があった事実や、それに孝景が参陣した事実は知られてない。従って、この部分は、第一次六角氏征伐と合わせて家宗の戦功を誇張するための作為であろう。

●勘助と家宗

地元の伝承[28]では、真柄十郎左衛門の父が勘助とされる。覚書

では、十郎左衛門の父は家宗となるので、勘助は家宗を指す可能性がある。

●朝倉氏家臣の真柄勘助

朝倉盛衰記の「朝倉家士座列幷素性之事」には、「真柄勘助」とある。兵庫（家次）の次に勘助が記されている点からすると、やはり勘助は家次の子である家宗を指す可能性がある。

●真柄勘助の屋敷跡

越前国之図・越前地理指南には、「下真柄村　真柄勘助屋鋪跡アリ」とあり、朝倉盛衰記の「朝倉家士住居之事」や城迹考（享保五年（一七二〇）頃成立）[29]にも、下真柄村に勘助が住んでいたとある。現在、その跡地には、立ノ内・東堀之尻・西堀之尻という字名が残る。上真柄村に兵庫（家次）、下真柄村に勘助の屋敷があり、やはり勘助を家次の子である家宗と見ると、上真柄村に父、下真柄村に子が住んでいたと整合的に理解できるようになる。

真柄家時　左京亮

家時は家宗の嫡男で、左京亮を称した。仏神を敬い、慈悲深い人であったとされる。覚書の記述はこれだけであり、家時には目立った活躍がなかったのかもしれない。

真柄家正　景家・十郎左衛門・備前守

家正は家宗の次男で、景家とも言い、十郎左衛門のちに備前守と称したとされる。景家の「景」は朝倉氏からの偏諱であろう。

朝倉宗滴が美濃に向けて出陣した際、それに従軍し、同国にて手柄を立てて名を揚げ、朝倉殿より感状を賜った。大永七年（一五二七）の京都桂川合戦でも比類のない働きで名を顕した。元亀元年（一五七〇）四月二十五日、織田信長が敦賀の天筒山城を落城させたため、朝倉義景が国中に軍勢を催促して出馬した際、家時の嫡男である景忠（後述）が先駆けとして出陣し、家正は宅良谷から出陣して景忠軍に合流し、二十八日には敦賀に着陣し、撤退する織田軍に追いついて首を討ち取った。同年六月、信長が近江小谷城の浅井氏を攻めた際、朝倉景健が大将となり一万余騎を率いて救援に向かい、二十八日には姉川を越えて徳川軍と戦った。その際、景忠・家正ら真柄一族は先手として奮闘し、家正は七尺五寸の大太刀を振るうも、徳川軍の匂坂式部に討たれ、家正の嫡男の十郎左衛門と次男の十郎もともに戦死したとされる。

《参考》

●朝倉氏家臣の真柄備中守、および家正に関する一次資料

当時の記録である朝倉義景亭御成記には、朝倉氏家臣として、「真柄左馬助」（景忠）とともに、「真柄備中守」とある。この

備中守は、名乗りから判断すると、家正を指す可能性が高く、覚書の備前守は単なる記憶違いであろうか。とすれば、家正は景忠とともに一次資料でその実在を確認できる人物ということになる。また、朝倉盛衰記の「朝倉家士座列幷素性之事」にも、「七十七真柄備中守」・「七十八　同左馬助」（景忠）とある。数字は朝倉氏家臣団内の序列を示しており、一世代下の景忠よりも、その叔父で戦功の多い家正のほうが序列が高かったようである。その他、山田世譜（十八世紀成立）[30]なる資料にも、姉川合戦で討死した人物として「真柄備中守家正」が登場する。また、大山咋神社（現、越前市宮谷町）では、明治時代の由緒書[31]に「明応年中（一四九二～一五〇一）地頭真柄備中守社殿を造立す」と見える。

●真柄備中守の屋敷跡

朝倉盛衰記の「朝倉家士住居之事」には、「今南西郡　一、宅良　真柄備中守」とある。真柄氏の本貫地である真柄荘とは別に、宅良に真柄一族である備中守の屋敷が存在したことは一見奇異にも映り、この記述を誤記とする見解[32]がある。しかし、覚書には、家宗が朝倉氏より恩賞として宅良谷を賜り、家正が金ヶ崎合戦の際に宅良谷から出陣したと見えることからすれば、右の記述は不可解なものではない。むしろ、家正に始まる庶流が、嫡流とは別に、宅良谷に拠点を持っていたことを推測させるとともに、備中守が家正を指す傍証ともなる。

なお、越前国之図・越前地理指南には、宅良の久喜村に「朝倉家真柄主税屋敷跡アリ」とあり、城迹考にも同様の記述がある。真柄主税は詳細不明であるが、地元の伝承[33]では、天正元年（一五七三）の織田信長による越前進攻の際、敦賀の城から逃げ出して、宅良の久喜村の屋敷に隠れたという。この伝承の真偽はともあれ、従来、なぜ宅良に真柄氏の屋敷跡の伝承が残るのか不明であったが、覚書や朝倉盛衰記の記述からすれば、宅良に真柄氏の屋敷があっても不自然ではないのである。

●朝倉宗滴の美濃出陣

朝倉宗滴話記[34]（永禄三年（一五六〇）頃成立）などによれば、天文十三年（一五四四）に宗滴が美濃稲葉山城に籠る斎藤利政を攻め、井口を放火したとある。この合戦を指しているか。とすれば、このあとに記される京都桂川合戦の方が年代が古くなり、記載の順番が前後するが、家正が京都桂川合戦で名を「顕」したという表現からすると、そうした記載の順番でもよい。

●京都桂川合戦

朝倉宗滴話記などによれば、大永七年（一五二七）、将軍足利義晴と管領細川高国の要請により朝倉宗滴を総大将とした越前衆が京都へ出陣し、桂川付近で堺公方軍と戦ったとある。宗滴の京都や美濃への出陣に家正が従軍していた点からすると、宗滴と家正の関係は深かったように思われる。

●金ヶ崎合戦

元亀元年（一五七〇）四月の記述は、金ヶ崎合戦を指す。越州軍記（天正五年（一五七七）成立ヵ）[35]では、朝倉義景が浅水まで出馬したが引き返し、朝倉景鏡が府中まで出馬したものの金ヶ崎城に籠る朝倉景恒に合力しなかったとあるが、覚書では、先駆けの真柄一族は敦賀に着陣したとする。

●姉川合戦

元亀元年（一五七〇）六月の記述は、姉川合戦を指す。基本的には、これまで知られている諸資料[36]の内容と一致するが、大きく異同がある点は以下で特筆する。

●二人の十郎左衛門

覚書では、姉川合戦で備前（中）守家正と、嫡男の十郎左衛門、次男の十郎が戦死したとし、さらに続けて、「信長記ニ十郎左衛門尉ト記タルコトハ備前守初ハ十郎左衛門尉ト云、兵術ノ達者ニテ度々武功多シテ世ニ名ヲ知ラレタル者也、後ニ其名ヲ嫡子ニ譲テ備前守ニ成ケレハ昔ノ名ヲ記タル也」と注目すべき記述がある。覚書の作者である田代養山は、自身の参照した甫庵信長記に記される「真柄十郎左衛門」が家正を指し、彼が若かりし頃は十郎左衛門と称し、兵術の達者でたびたび武功を挙げ、世に名を知られた者であり、のちにその名乗りを嫡子に譲って備前（中）守になったが、そうした経緯のために昔の名乗りが記されてしまったとするのである。

確かに、甫庵信長記には、「真柄十郎左衛門」とあるのみで、実名は記されていない。また、甫庵信長記の底本に当たる、織田信長家臣太田牛一が執筆した信長記（慶長初頭成立）[37]も同様である。さらには、信長記の諸本のなかで最も信頼できる、すなわち、姉川合戦に関する資料で最も信頼に足る、牛一自筆の池田家文庫本（慶長十五年（一六一〇）成立）[38]でも「討捕頸之注文」として「真柄十郎左衛門」とあるのみで、やはり実名は記されていない。

そのうえで、この池田家文庫本を観察すると、「真柄十郎左衛門」とある部分の少し下に貼紙があることに気づく。この貼紙は、従来ほとんど注目されてこなかったが、石田善人氏によれば、「紙質の薄い紙で、文字は明らかに牛一の筆跡とは違って」[39]おり、慶長十五年に同本が岡山藩池田家へ献呈されたのちに藩主やその周辺で添付されたと考えられる。そして、この後代の貼紙には、「首青木民部取候、若き時之名可有候」と記されている。これを自然に解釈すると、真柄十郎左衛門の首は青木民部（一重）が討ち取った、（青木の）若い時の功名であろう、となるが、一方で覚書の存在を踏まえて後半部分を解釈すると、真柄十郎左衛門は（家正の）若い時の名前であろう、とも読める。現状、いずれの解釈とも決し難いが、後者の解釈を是とするなら、後代に、信長記や甫庵信長記に記される「真柄十郎左衛門」が家正を指すとする人が複数いた可能性があることになる。

ともあれ、家正が一次資料でその実在を確認できる人物であることを押さえたうえで、覚書に従うならば、甫庵信長記に登場する「真柄十郎左衛門」は家正を指しており、本来であれば、姉川合戦時の名乗りである備中守が記されるべきであったが、若年時の名乗りである十郎左衛門が有名であったため、そちらが記されてしまったと理解される。ただし実際には、信長記に載る「討捕頸之注文」の作者が家正を指して「真柄十郎左衛門」と記したのか、姉川合戦時に十郎左衛門を名乗っていた家正嫡男を指して「真柄十郎左衛門」と記したのかは不明としか言いようがなく、「討捕頸之注文」で「真柄備中守」と記されずに「真柄十郎左衛門」とのみ記されてしまったことが混乱を招く要因になったと考えられる。そのために、「討捕頸之注文」を継承した信長記や甫庵信長記が流布していくと、「真柄十郎左衛門」が家正を指すのか、家正嫡男を指すのか分からなくなり、さらに後代には、その二人が「真柄十郎左衛門」という一人の人物として伝承されていった可能性を指摘できる。換言すれば、後代の資料に記される「真柄十郎左衛門」には家正と家正嫡男の二人の事績が含まれる可能性に留意する必要がある。

●姉川合戦で家正を討ったのは誰か

まず、覚書の家正の記述を詳細に確認しよう。家正は七尺五寸の大太刀を振るって奮戦したが、老武者であったため、戦い疲れて味方から離れて休んでいたところ、徳川軍の匂坂式部に出くわした。式部は良き敵と思い、一鑓突いたが、家正の大太刀に打ち据えられた。そこに、弟の匂坂六郎二郎が助けに入ったが、これも鍔本から打ち折られた。さらに、弟の匂坂六郎五郎が来て、その郎従が斬られたすきに、鎗を持って家正を突き倒した。その直後、家正は起き上がり、今はこれまで、真柄が首を取って男の高名にせよと述べた。六郎五郎は式部を起こして首を取ってくださいと言ったが、式部は手負いであったため、そち（六郎五郎）の高名にせよと譲った。しかし、六郎五郎はあくまで私は助太刀に来たのですと言って、家正の首を取り、式部の前に差し出して、さらに前に進んでいった、と式部本人が話したとされる。覚書の記述がここまで具体的なのは、先述したように、作者の田代養山（もしくはその父の養仙）が福井城下に住んでいた式部本人から直接聞いた話であることや、養山が真柄氏の子孫であり家伝を継承していた可能性があるとともに、甫庵信長記（先述の通り「真柄十郎左衛門」と記される）も参照していたことなどが理由として挙げられる。こうした性格を持つ覚書では、姉川合戦で家正を討ったのは、式部（厳密に言えば、六郎五郎であるが、六郎五郎はその功を式部に譲ったことになっている）とされ、甫庵信長記では、「真柄十郎左衛門」の「嫡子」を討ったのが青木一重とされるのである。

一方、甫庵信長記の底本に当たる信長記では、「真柄十郎左衛門」が匂坂氏に討たれたとする記述はなく、青木一重に討たれたと記されており、成立年代の古い信長記の記述に賛同する研究(40)

もある。ただし、先述したように、池田家文庫本信長記を見ると、あくまで後代の貼紙に「首青木民部取候、若き時之名可有候」と記されているのみであり、これは信長記成立当初のものではない。また、後代の貼紙の記主が信長記本文の「真柄十郎左衛門」を家正と捉えていたのか、家正嫡男と捉えていたのか決し難いところである。いずれにせよ、一重の功績を誇張もしくは特筆する貼紙が岡山藩池田家周辺で添えられた背景としては、信長記の筆者・献呈者である太田牛一の子の牛次が一重に仕えていたことが配慮された可能性や、次に紹介する資料で見られるように、岡山藩池田家では一重の討ち取った人物が真柄かその子かに関心があったことと関連する可能性などがあろう。

岡山藩主の池田光政が語った逸話をまとめた烈公間話（元禄三年（一六九〇）成立）[41]には、能勢小十郎（頼隆）が青木民部（一重）に尋ねて、「あなたが討ち取ったのは真柄とも、真柄の子とも言われていますが、いかがでしょうか」と述べ、一重が答えて、「大兵であったので、人の子とは申し難き者でした」と述べたという逸話が紹介されている。すでに江戸時代前期において、一重が真柄かその子のどちらを討ち取ったのか、世上で混乱があったようである。そして、岡山藩池田家では、この一重の答えに対して、「一重は親の方か子の方かは知らないが、子の方とは言い難い者とする」と注釈を付している。この烈公間話と池田家文庫本信長記の後代の貼紙が関連するのであれば、その貼紙は真柄（親の方）を指しているのかもしれない。ともあれ、ここで注目されるのは、一重自身も真柄かその子のどちらを討ったのかは知らず、あくまでも体躯から判断して子どもとは言い難いと述べ、明言を避けている点である。また、一重の答えである「人の子とは申し難き者」というのは、人間の子とは言い難い者（鬼の子のような者）という意味にもとれ、やはり一重が答えをはぐらかしたものとも理解できる。

以上のように、匂坂式部自身が家正を討ち取ったと証言した一方で、青木一重が「真柄十郎左衛門」を討ち取ったとする信長記の該当部分は成立当初のものではないうえ、一重自身も誰を討ち取ったと明言しなかったことを踏まえると、家正は式部に討たれ、家正嫡男は一重に討たれた[42]可能性が高い。

●十郎左衛門の家系（十郎左衛門家）

先述したように、覚書では、家正には、嫡男の十郎左衛門、次男の十郎がおり、ともに姉川合戦で戦死したとされる。

覚書のように、家正の存在を認識し、家正と十郎左衛門を書き分けている資料はほとんど存在せず、他に一点のみ確認できる。それが朝倉盛衰記で、「朝倉家士座列幷素姓之事」に「真柄備中守」とともに、「同十郎左衛門尉景隆」（いわゆる直隆で、「景」は朝倉氏からの偏諱であろう）・「同十郎隆基」と見える。

この朝倉盛衰記の記述を覚書に当てはめるならば、家正には、嫡男の十郎左衛門直隆、次男の十郎隆基がいたと見なせる。

しかし、朝倉盛衰記の記述のみでは、直隆と隆基を兄弟の関係

ではなく、父子の関係とも捉えうる。すなわち、彼らを兄弟の関係とする覚書は記憶違いとする捉え方である。覚書は家宗－家時－景忠と続く嫡流の子孫が作成したものであり、庶流の十郎左衛門家に関する記憶が曖昧であった可能性はある。加えて、直隆と隆基を父子の関係とする後代の記録類・系図[43]などが極めて多いことも指摘できる。たとえば、永禄五年（一五六二）の加賀一向一揆での直隆・隆基父子の活躍を描く明智軍記（元禄六年（一六九三）以前に成立）[44]や、永禄十一年に直隆・隆基父子が将軍足利義昭の前で大太刀と武術を披露したことを記す朝倉始末記などが知られている。

以上からすると、直隆と隆基を兄弟関係と見るべきか、父子関係と見るべきかは、後者に分があるようにも思えるが、現状、これに関する一次資料はなく、決定打となる資料も見当たらない[45]。ただ、いずれにせよ、先述したように、後代の資料に登場する「真柄十郎左衛門直隆」については、十郎左衛門として武名を轟かした家正の事績も含まれる可能性に配慮しなければならないと言えよう。

なお、十郎左衛門家の菩提寺として時宗興徳寺（現、越前市宮谷町）が有名である。そこには、十郎左衛門家の戒名や位牌・墓石などが伝来している[46]。

また、十郎左衛門家に関する資料として以下にも触れておきたい。『敦賀郡誌』[47]には、天台真盛宗玉泉寺（現、敦賀市山）の開基である玉泉院清心比丘尼について、「真柄家譜には清心は朝倉宗滴の娘、真柄十郎左衛門直隆の室なり、宗滴、金崎居城の時、沓見村にカケ屋敷あり、直隆、此に籠居の事あり、朝倉滅後、清心此に住居す、是真柄屋敷なり、天正十八年（一五九〇）三月一日寂、年八十三と見えたり、墓石には天正八年とす、其墓、寺内西北隅に在り、初は、東南方に在りしを、五十年許以前に改葬したるなり、其墓も寛延の頃、改修したる者にて、旧墓石には横に真柄景龍建之、裏に朝倉金吾義景叔母とありしとなり、其墓石は墓下に埋めたりと云ふ」とある。真柄家譜なる資料は未見であるが、それによれば、清心は朝倉宗滴の娘で「真柄十郎左衛門直隆」の室という。宗滴が敦賀郡司として金崎城にいた時、沓見村（現、敦賀市沓見）に屋敷があり、「直隆」はそこに籠居していたことがあるらしい。その屋敷で清心と「直隆」は出会ったのであろうか。朝倉氏滅亡後、清心はその屋敷に居住し、そこは真柄屋敷と呼ばれたというのである。覚書では、家正が宗滴に従ってたびたび合戦で功を挙げるなど、家正と宗滴の関係の深さが窺われるので、家正の家系が宗滴の娘を妻とすることはあながち不自然ではない。ただ、真柄家譜に記される「直隆」が、実際には、家正を指すのか、家正嫡男の直隆を指すのかは不明である。清心は天正八年もしくは天正十八年に八十三歳で没したとあるから、生まれは明応七年（一四九八）もしくは永正五年（一五〇八）となり、元亀元年（一五七〇）に老武者となっていた家正に近い世代の人物かもしれず、家正の妻である可能性もある。ただ、直隆・隆基の年齢も諸説[48]あり、確定し難い。

さらに、清心という人物に関連して、興徳寺編『真柄』六[49]には、「真柄十郎左衛門が姉川で戦死した後、その妻女と三男は当時の縁をたよって、沓見に居住した。屋敷は三十間四方にて、前に門塀、四方に堀があり、三方は山に囲まれていた。玉泉寺縁起より」とあるのも注目される。玉泉寺縁起なる資料も未見であるが、それによれば、「真柄十郎左衛門」の妻の清心と、三男（孫とも）の源太夫隆重が沓見の真柄屋敷に居住したという。これに関して、本稿の執筆過程における調査で、玉泉寺には「真柄十郎左衛直隆・玉泉院清心比丘尼」とある位牌と、「十良太郎隆基・源六郎真信・源太輔隆重」とある位牌が新たに見つかった。従来、この隆重は、越後塩俵真柄家の系図など[50]に登場し、その家祖であったことが知られていたが、玉泉寺に関わる資料にも登場し、敦賀の沓見で難を逃れたあと、越後に向かったと推定できるようになったのである。なお、敦賀の沓見にはその他にも真柄氏に関する伝承が残されている[51]。

真柄十郎左衛門

十郎左衛門は家正の嫡男で、家正より十郎左衛門の号を譲られた。家正とともに姉川合戦で討死したとされる。

真柄十郎

十郎は家正の次男で、家正とともに姉川合戦で討死したとされる。

真柄景忠　左馬助

景忠は家時の嫡男で、家正の甥に当たる。左馬助を称した。身長が高く、鬚が多い風貌であった。その力量は父祖を越えたとされる。

府中の鍛冶師千代鶴を召し、仮屋・鞴（ふいご）を建て、九尺九寸の太郎太刀、八尺の次郎太刀を造った。兵法の達人で、常に鎗・長刀を相手に鍛錬していた。その場所は氏神の熊野権現の御前であった。ある時、朝倉景鏡が小太刀の達人である戸田清元（富田勢源）との対決を望んだ際、「我が野太刀は敵軍の城門・塀・柵を截り（断ち切り）破るためのものである。どうして小太刀と勝負を争うのか」と述べたが断り切れず、景鏡邸の庭で清元と対峙した。清元は向かうことができずに退いたので、大太刀を振り廻して庭にある松の樹を截って落とした。景鏡邸での出来事は郎従や寛永年間（一六二四～四五）の神明寿福院（その父が景鏡の小姓として座敷で実際に見た）の話だという。

また、家子・郎従の大力の者に大太刀を持たせて戦場に臨み、一陣を破らないことはなかった。元亀元年（一五七〇）の金ヶ崎合戦では、先駆けとして出陣し、宅良谷から来た家正と合流し、戦場へ向かった。同年の姉川合戦では、朝倉軍の先陣として、嫡男の家重、一族の家正や嫡男十郎左衛門・次男十郎、五郎兵衛や

嫡男助三郎をはじめ、家子・郎従五十余人を率い、徳川軍を攻めた。朝倉軍が退却し始めると、その殿（しんがり）として、景忠は九尺九寸、家重は七尺五寸、家正は七尺五寸の大太刀を振るって奮戦したが、真柄勢は散り散りになり、家重・家正・十郎左衛門・十郎・五郎兵衛らが討死した。景忠は何度も防戦し、味方を助け、小谷城まで退くことができた。家子の川瀬市右衛門[52]や「野太刀持」の川瀬三郎兵衛は、真柄討死と聞き、大太刀の鞘を捨て、小谷城に帰ったところで景忠と再会した。この鞘は拾われて美濃の南宮大社に奉納された。同年秋以降、朝倉景鏡が近江の堅田砦に籠る織田甲斐守・坂井政尚ら織田軍を攻めた際、景忠は市右衛門らを召し連れ、先駆けとして敵陣を攻めた。大太刀を持って木戸を截り破り、土蔵を截り破って敵の鉄砲隊を討ち取るなど、大太刀の手柄は天下に隠れないものとなり、朝倉軍は織田軍を一人も漏らさず討ち取り、大勝利を得たとされる。

《参考》

●景忠に関する一次資料、および朝倉氏家臣の真柄左馬助

はじめにで触れた松原氏も挙げたように、正月一三日付の真柄左馬助景忠起請文がある。これは、景忠が浄土真宗の橋立真宗寺の門徒であったことを示す一次資料である。また、当時の記録である朝倉義景亭御成記には、朝倉氏家臣として、「真柄備中守」（家正）とともに、「真柄左馬助」（景忠）とある。家正・景忠は一次資料でその実在を確認できる人物である。

●景忠と家正の関係

これもはじめにで触れたように、松原氏は、景忠を嫡流、十郎左衛門を庶流と推測した。これは景忠が朝倉氏から偏諱「景」を受けたことに拠るものと思われる。ただ、覚書によれば、家正も偏諱「景」を受けて景家と称したので、偏諱を受けたことが必ずしも嫡流を意味しない。とはいえ、覚書では家次－家宗－家時－景忠－家重（後述）－家氏（後述）が嫡流として扱われている点や、家氏が丹羽長秀から本貫地を安堵されたことを示す一次資料が残っている点（後述）からすれば、松原氏の推測は結果的には正しかったと言える。また、先述したように、朝倉盛衰記の「朝倉家士座列幷素性之事」によれば、朝倉氏家臣団内の序列としては、嫡流の景忠より、叔父で庶流の家正のほうが高かったようである。これは家正の戦功や朝倉宗滴との関係に拠るものであろう。

なお、庶流の十郎左衛門家の他、一族の五郎兵衛・嫡男助三郎も確認できる点は押さえておく必要がある。

●真柄左馬助の屋敷跡

朝倉盛衰記の「朝倉家士住居之事」には、「今南西郡　一、北村　真柄左馬助」とあり、北村（現、越前市北町）に真柄左馬助が住んでいたとされる。建撕記（応仁二年（一四六八）に永平寺十四世となった建撕の書）[53]には、「覚念、今ノ北村真柄ノ先祖ナリ」とあり、十五世紀中頃にはすでに北村に真柄氏の一流がい

たことが分かっている[54]。

なお、ここで、真柄氏の屋敷跡と伝承される場所をまとめると、一乗谷[55]・上真柄・下真柄・北村・宅良（久喜）・沓見と複数にわたることとなる。

●姉川合戦と真柄一族

姉川合戦では、織田・徳川勢が勝利を得て、浅井・朝倉勢は多数の死傷者が出て大敗したと一般的に言われている。しかし、姉川合戦について最も信頼できる資料である池田家文庫本信長記の「討捕頸之注文」では、朝倉勢の武将の死者は真柄十郎左衛門ら六人、朝倉・浅井勢の死者は千百余人程度であり、朝倉始末記に見える朝倉勢の死者百二十余騎も踏まえると、朝倉勢は決して大敗とは言えないと近年の研究では言われている[56]。ただ、覚書では、朝倉勢の殿を務めた景忠率いる真柄勢五十余人のうち、嫡男の家重をはじめ、一族の家正・十郎左衛門・十郎・五郎兵衛など多くが討たれ、この合戦で生き残った真柄一族は、景忠の他、助三郎だけに過ぎない。朝倉勢の死者がそれほど多くなく、決して大敗とは言えない状況のなか、真柄一族は大打撃を蒙っていたのである。そうした真柄一族の多くの死をもって朝倉勢の退却を成功させた功績が、一族で最も有名な十郎左衛門という名に仮託されて語り継がれていったのではあるまいか。とすれば、十郎左衛門の伝説は、姉川合戦での真柄一族の悲運・功績から生み出されたと言えよう。

●志賀の陣

元亀元年（一五七〇）秋以降の記述は、志賀の陣を指す。基本的には、これまで知られている諸資料[57]の内容と矛盾せず、景忠の功績を特筆している。

真柄家重　左近・清空居士

家重は景忠の嫡男で、左近を称した。景忠とともに姉川合戦に参陣し、七尺五寸の大太刀を振るうも、討死した。郎従がその首を持って越前に戻り、山（武衛山）の霊泉寺（現、越前市池泉町）に葬った。法名は清空居士。なお、朝倉義景の同朋衆である策庵は家重と昵懇で、家重の屋敷によく出入りしていたとされる。

真柄家氏　加助・実雄全真禅定門

家氏は家重の嫡男で、加助と称した。天正元年（一五七三）八月に織田信長が朝倉義景を滅し、富田長繁が府中に入ると、深山に隠れていた朝倉旧臣の名の知れた武将や戦死した武将の子孫が召し出され、当時十五歳であった家氏も本領を安堵されたという。この点から、家氏は永禄二年（一五五九）生まれで、姉川合戦の時は十二歳であり、合戦には参加しなかったと考えられる。

翌年二月、一向一揆によって富田長繁が討たれ、越前の諸侍で

信長に召し出された者もほとんどが討たれた。家氏も一向一揆勢と戦ったが、一族・家子・郎従の多くが討死して防戦できなくなったので、真柄館を開いて僅か三十余人で池田郡の山中に引き籠った。一向一揆勢が池田郡へ追ってきたが、家子の川瀬市右衛門・同又作・同三郎兵衛らとともに奮戦し、何とか防いだ。

翌年、池田郡の山中に隠れていた家氏は、縁族の由緒があるため、不破光治に招かれて知行を賜り、与力として吉田作助（修理亮、のちに豊臣秀次・結城秀康に仕えた）・中川竹千代（のちに堀尾吉晴に仕えた）を付けられ、府中城に在城したとされる。これは、光治が府中三人衆となった天正三年（一五七五）九月以降の話であろう。

光治の死後、武者修行をして世に名を知られ、豊臣秀吉の時代には越前で本領を賜り、再び故郷に帰った。その後、朝鮮に出兵し、文禄二年（一五九三）九月二十三日に朝鮮で討死した。法名は実雄全真禅定門という。

《参考》

●一向一揆

朝倉始末記には、宅良・三尾河内・真柄・北村でも一向一揆が蜂起し、諸侍の館へ押し寄せ、鞍谷屋形・千福・真柄・北村・氏家・瓜生・千秋・佐々布光林坊以下の諸侍が追い払われたとある。先述の通り、真柄氏は浄土真宗の橋立真宗寺の門徒であったが、一向一揆の攻撃の対象となったようである。

●家氏と不破氏

新撰豊臣実録（寛文五年（一六六五）成立）[58]には、天正十年（一五八二）六月の美濃北方合戦（稲葉良通と安藤守就の戦い）での家氏の動向が記されている。「真柄加介家氏」について、「今按、加介ハ池大納言平頼盛二十二世之胤、真柄左馬助景忠孫也、朝倉義景勇士真柄十郎左衛門家経等一族」とあり、景忠の孫で、十郎左衛門家経（家正ヵ）の一族としており、この点は覚書の記述と一致する。また、家氏は不破光治の次男彦五郎に従い、不破氏の居城美濃西保城に拠り、彦五郎が京都で本能寺の変にあって安否が分からないなか、西保城の留守居を務めたとある。この点も覚書に記される家氏と不破氏の関係からすれば、自然な話と思われる。さらに、家氏は光治の娘婿の稲葉方通を城主の代わりとして迎え、稲葉方について安藤方を攻め、良通より「真柄抜萃之勇」と称され、信国の刀を当座の賞として与えられ、郎従の島川九介・川瀬又作らも功を挙げたとある。覚書に言う、武者修行をして名を知られたというのは、こうした美濃での事績を指す可能性が高い。

●家氏に関する一次資料、および丹羽長秀家臣の真柄加介

はじめにで触れた松原氏も挙げたように、天正十一年（一五八三）八月四日付の丹羽長秀領知宛行状がある。本状は、越前を治めた長秀が「真柄加介」（家氏）に対して、府中三人衆

の前田利家の領地であった真柄村の内二百五十石を与えたもので、長秀家臣としての家氏の実在を確認できる一次資料となる。家氏が武者修行のあと、豊臣時代に越前で本領を賜り、帰郷を遂げたという覚書の記述に対応するものである。また、真柄氏の本貫地が安堵された点は、家氏が嫡流の系統であったことを示している。

●朝鮮出兵（文禄の役）

覚書では、家氏が丹羽長秀のあと、誰に仕えて朝鮮へ出兵したのか記されていないが、天正十三年（一五八五）に越前府中を領した木村常陸介[59]に従って朝鮮へ出兵し、討死した可能性がある。

真柄宮寿丸

宮寿丸は家重の次男で、家氏の弟に当たる。天正元年（一五七三）、家氏が本領を安堵された際、宮寿丸は五歳で、人質として家子八人とともに羽柴秀吉が接収した近江小谷城へ遣わされたとされる。この点から、宮寿丸は永禄十二年（一五六九）生まれで、家氏と同様に姉川合戦に参加せずに生き延びたと考えられる。また、生年は田代家系図の田代養仙の記述とも一致する。

翌年、越前で一向一揆が蜂起し、朝倉旧臣のほとんどが討たれると、小谷城に取り残された朝倉旧臣の人質はみな追放されたとされ、宮寿丸がどうなったかは記されていない。

その後、家氏が不破光治に仕えて府中城に在城した際、宮寿丸も一緒に居り、のちに縁族の稲葉良通に引き取られて養育されたという。

《参考》

●宮寿丸と稲葉良通

先述したように、新撰豊臣実録では、家氏と良通の関係を確認できるので、家氏の弟の宮寿丸が良通に引き取られていてもおかしくはない。良通は医聖と称された曲直瀬道三に師事するほど医学に造詣が深く、宮寿丸はこの良通のもとで医学を学んだ可能性が高い。そして結果的には、田代家系図にあるように、道三の師に当たる田代三喜の家系である田代大膳（養元）の猶子となり、田代家の名跡を相続し、田代養仙と号した。ここで、真柄氏の血脈は「武の道」から「医の道」へ転換したことで、近世を迎えることができたと言えよう。

真柄五郎兵衛

五郎兵衛は真柄氏の一族で、姉川合戦で討死したとされる。

真柄助三郎

助三郎は真柄氏の一族で、五郎兵衛の嫡男である。元亀元年（一五七〇）の姉川合戦に参加し、父や一族の多くが討死するな

かで、景忠とともに生き延びた。天正元年（一五七三）、家氏が本領を安堵されると、助三郎も本領を安堵された。翌年、一向一揆が蜂起すると、助三郎は越前から飛騨をまわって尾張に出て、織田信長に仕えた。同年、信長が伊勢長島の一向一揆を攻めた際、信長の馬前で奮戦し、一揆衆の鼻を切って「鼻真柄」と称され、感状を賜った。信長の死後、加賀の前田利家の招きに応じて、越中富山城代などを務めたが、子孫はいなかったとされる。

《参考》

●織田信長による伊勢長島の一向一揆攻め

池田家文庫本信長記によれば、天正二年（一五七四）七月に信長は伊勢長島の一向一揆攻めを開始したが、九月二十九日には一揆勢の最後の反撃にあい、抜刀の者七～八百人が信長の本陣に切り込んできて、信長の一門衆をはじめ多くが討死したとある。助三郎はこの乱戦の最中に奮戦した可能性がある。

●助三郎に関する一次資料、および前田利家家臣の真柄助三郎

助三郎が利家に仕えていたことを示す一次資料が二点残されている。一つは、（天正十年（一五八二））五月十五日付の前田利家書状[60]で、柴田勝家に従って越中魚津城を攻めていた利家が、能登に居た「真柄助三郎」らに対して、能登の牢人衆が宇出津に上陸したことにつき忠節を促したものである。もう一つは、文禄三年（一五九四）六月十五日付の前田利家印判状写[61]で、利家が「真柄助三郎」らの伏見城普請無沙汰につき、扶持を放って知行を没収すると伝えたものである。両資料からすると、助三郎は実在の人物で、利家に仕えていたことは間違いない。覚書で富山城代を務めたとする点は誇張とも思われるが、子孫はいなかったとする点は彼が前田家から追放されたことと関係するのかもしれない。

三、真柄一族の大太刀

従来、真柄十郎左衛門が長大な大太刀を振り廻して戦場で活躍したことは後世の記録類や講談を通じてよく知られており、十郎左衛門が使用したとされる大太刀、いわゆる真柄の大太刀も各地に現存している。

しかしながら、覚書では、大太刀に関して、これまで全く知られていなかった事柄が記されている。

そもそも、真柄氏と大太刀の関わりは、十郎左衛門ではなく、家宗に始まったとされる。十五世紀末の将軍による六角氏征伐の際、家宗は八尺の大太刀を振るって手柄を立て、その活躍は近江坂本の児童の諺に「先陣真柄、太刀振真柄」と言われるほどのものであった。真柄氏の「野太刀ノ兵法」はここから始まったのだという。この点からすれば、真柄氏は先陣で大太刀を振るう兵法を得意とし、その兵法を家宗から代々相伝してきたと捉えられる。

また、従来、十郎左衛門が太郎太刀・次郎太刀という二振りの

大太刀を刀工に造らせて使用したとされてきたが、覚書では、これを景忠の事績としている。景忠は府中の鍛冶師千代鶴を召し、仮屋・鞴を建て、九尺九寸の太郎太刀、八尺の次郎太刀を造り、これらを持って数度の合戦に臨んだという。覚書は、十郎左衛門ではなく、景忠の系統の子孫が著述したもので、景忠の事績が誇張されている可能性もあるため、太郎太刀・次郎太刀に関する話は十郎左衛門（直隆よりも武名を轟かせた家正）の事績である可能性もあろう。なお、太郎太刀・次郎太刀の長さは資料によってさまざまで、覚書での九尺九寸・八尺という数値もどこまで正確か分からず、ある程度誇張されたものと考えられる。

さらに、これまであまり語られることのなかった大太刀の使用方法や持ち運び方なども記されている点は興味深い。景忠は大太刀を持って常に鎗・長刀を相手に鍛錬を行い、朝倉景鏡邸で小太刀の達人である戸田清元との対決に臨んだ際には、「我が野太刀は敵軍の城門・塀・柵を截り（断ち切り）破るためのものである。どうして小太刀と勝負を争うのか」と述べ、庭にある松の樹を截って落とし、志賀の陣では敵軍の堅田砦の木戸や土蔵を截り崩したとされる。大太刀は人を斬るためのものというより、城門・塀・柵などの工作物を截り破るためのものであったらしい。こうした使用方法ゆえに、大太刀を振るった真柄一族は先駆けとして敵陣へ乗り込むことが多かったのであろう。また、景忠は家子・郎従のうち大力の者を集めて、その者達に大太刀を持たせて合戦に臨んだ。彼らは「野太刀持」と呼ばれ、とくに家子の川瀬三郎兵衛は非常に大力で、「担げ持ち」（肩に担いで持つ）をしていた。そして、景忠が大太刀を振るっている最中は、「野太刀持」がその鞘を持つことになっており、三郎兵衛は姉川合戦の際、景忠が討死したと勘違いし、鞘を捨ててしまったという。

加えて注目したいのは、家宗が八尺の大太刀を使用し、姉川合戦の時には、景忠が九尺九寸、家重が七尺五寸、家正が七尺五寸の大太刀を振るったと記されている点である。とすると、真柄一族の多くが、しかも同時に、大太刀を使用していたことになる。また、一人の武将が大太刀を家子・郎従に持たせて合戦に臨んだのであれば、予備として複数の大太刀を戦場に持ってきていた可能性もあろう。従って、真柄一族が使用した大太刀が数多くあり、各地に伝来した可能性が考えられることが重要である。

というのも、現在、十郎左衛門が使用したとされる真柄の大太刀や、それに関する伝承が各地に伝わっているからである。そこで、それらについて、最も有名な尾張の熱田神宮に伝来する真柄の大太刀から列記していこう。

尾張の熱田神宮には真柄の大太刀が二振り現存している。一振りは、通称「太郎太刀」、朱銘跡「末之青江」、刃長二百二十一・五センチメートルの大太刀である。旧社家田島家文書の熱田皇大神宮江真柄氏大太刀奉納記（成立年未詳）[62]では、天正四年（一五七六）に尾張国春日井郡熊野荘の山田甚八郎吉久が熱田神宮へ奉納したとされる。既出の山田世譜には、この吉久が織田信長に仕えて姉川合戦に参陣し、真柄備中守家正を斬り、大太刀を

得て熱田神宮へ奉納したと記されている。山田世譜は家正の存在を伝えるが、山田氏の功績を創作する節もあり[63]、匂坂式部が家正を斬ったとする覚書からすれば、吉久が家正を斬ったという部分は創作である可能性が高い。ただ、吉久が大太刀を入手していた可能性までは否定できない。吉久が入手したのは、家正が複数所持していた大太刀や他の真柄一族の大太刀の可能性があるからである。あるいは、甫庵信長記に記される、十郎左衛門と戦った匂坂氏郎従の山田宗六なる山田姓の人物と吉久が何らかの関わりがあった可能性も考えられている[64]。もう一振りは、通称「次郎太刀」、朱銘「千代鶴国安」、銘「熱田大明神奉寄進御太刀、信長御内態（熊）若夫婦之者也、元亀元年（一五七〇）八月吉日」、刃長百六十六・七センチメートルの大太刀で、姉川合戦直後に信長の家臣である熊若夫婦が寄進したとされる。これも姉川合戦に参陣した真柄一族の誰かの大太刀である可能性があろう。ともあれ、熱田神宮に伝来する真柄の大太刀はいずれも、姉川合戦の勝者となった信長の家臣が奉納したと伝えられている。尾張ではこのほか、張州雑志（安永年間（一七七二～八一）頃成立）[65]によれば、一宮の真清田神社に、長さ六尺四寸、巾三寸の鞘、津島神社に、その柄が伝来していたという。これは、熱田・真清田・津島の尾張三社への分割奉納を意味するとも考えられている[66]。

加賀の一宮である白山比咩神社に現存する真柄の大太刀も有名である。これは、銘「行光」、刃長百八十六・五センチメートルの大太刀で、行光は室町時代の加賀の刀工として知られる。寛永五年（一六二八）に加賀藩主の前田利常が造らせた拵と黒漆塗箱も付属する。なお、金沢藩士富田景周による加賀国石川郡白山神社蔵真柄某大刀考（文政八年（一八二五）成立）[67]では、越前の一宮である気比神宮にあった大太刀が白山比咩神社に奉納されたとする。興徳寺編『真柄』十[68]では、朝倉氏と加賀一向一揆との合戦の際、十郎左衛門が奉納したものと見ている。覚書や一次資料からは、助三郎が前田利家に仕えていたのは間違いないので、彼が奉納したものである可能性もあろう。

近江彦根藩士匂坂家に伝来した真柄の大太刀も知られる[69]。これは、無銘、刃長百五十七・五センチメートルの大太刀で、匂坂兄弟の分捕り品として、縁のある彦根藩士匂坂家に兜とともに譲渡されたという。覚書や甫庵信長記と似た内容を持つ真柄大太刀之記（安政二年（一八五五）成立）[70]なる由緒書も伝わる。覚書に記される、匂坂式部の証言からすれば、姉川合戦で家正が所持した大太刀の一振りである可能性が高いであろう。

次に、あまり知られていないが、美濃の一宮である南宮大社にも真柄の大太刀が現存している。これは、刀身が半分に切断されており、茎側の半身に当たる。切っ先側の半身は近江の竹生島にあると伝承されているが、筆者は未見である。覚書では、姉川合戦の際、景忠の所持していた大太刀の鞘が、「野太刀持」の川瀬三郎兵衛によって捨てられ、某に拾われて南宮大社に奉納されたとされる。現在、この鞘は見当たらない。刀身（もしくはその半身）については、家氏の仕えた不破氏が南宮大社と深い関わりを

持っており、その関係で奉納された可能性があろう。美濃ではこのほか、白山長滝神社にも真柄の大太刀が現存している。興徳寺編『真柄』十によれば、白鞘に「間柄十郎左衛門□□」という墨書があり、天文九年（一五四〇）に朝倉氏が美濃の郡上に進攻して長滝寺（白山長滝神社の別当寺）に布陣した際、十郎左衛門が戦勝祈願として奉納したものと見ている。覚書に記される、家正の美濃出陣がこの合戦に当たる可能性もあろうか。

最後に、地元の越前でも、真柄の大太刀に関する伝承がいくつか伝わっている。越前の一宮である気比神宮では、四戦紀聞（宝永二年（一七〇五）成立）[71]に、姉川合戦の際に越前兵が真柄の大太刀を持ち帰り、気比神宮へ奉納したとあり、また、既出の加賀国石川郡白山神社蔵真柄某大刀考には、その大太刀が白山比咩神社へ奉納され、小豆が三升ほど入る鞘袋が気比神宮に残っていたと記されている。その他、足羽神社[72]や今立郡神明村神官瓜生氏[73]にも真柄の大太刀が伝来していたという。

なお、真柄の大太刀ではないが、真柄直（隆）基が造ったとの銘がある鎗（三角穂、銘「真柄十郎三郎直基造之、永禄七年八月日」、長さ三十六・五センチメートル、幅四・四センチメートル）が出羽庄内藩士の家に伝来していたという[74]。

以上、十郎左衛門が使用したとされる真柄の大太刀や、それに関する伝承を列挙した。従来、ともすれば、どれが本物かという議論もあったが、覚書からすれば、真柄一族が使用した大太刀は数多くあり、各地に伝来していてもおかしくはない。とりわけ、姉川合戦では真柄一族の多くが討死したので、敵方が大太刀を複数接収したとしても何ら不思議ではない。そして、それらの大太刀は世上有名な十郎左衛門が使用した大太刀と喧伝されて伝えられていったのではないだろうか。また、真柄一族の大太刀が残された背景として、真柄一族による戦勝祈願のための奉納や、真柄一族を討ち取った者による奉納・保管など、多様な可能性が考えられているが、覚書からすれば、家氏と美濃の不破氏、助三郎と加賀の前田氏というように、真柄一族と縁のある土地に大太刀が残された可能性も指摘できるのである。

おわりに

覚書や真柄氏関連資料を紹介・検討した本稿の成果をここで簡単にまとめておこう。

最も重要なのは、これまで不鮮明であった戦国時代における真柄氏の系譜関係や歴代の事績が明らかになったことである。真柄氏中興の祖と言うべき家次から始まり、家宗－家時－景忠－家重－家氏と続く嫡流、家宗の次男の家正に始まり、直隆・隆基（直隆と兄弟関係か父子関係かは不明）・隆重（家正・直隆・隆基いずれの子かは不明）と続く庶流（十郎左衛門家）、家重の次男の宮寿丸（田代養仙）に始まり、田代養山と続く庶流（福井藩田代家）、五郎兵衛－助三郎と続く一族、そのほか越前市大屋町の穴地蔵古墳石壁に見える光家を確認できた。なかでも、景忠・家

氏・家正・宮寿丸・田代養山・助三郎・光家は一次資料でその実在を確認できる点は押さえておく必要があろう。

こうした真柄氏にとって最も重大な出来事が姉川合戦であったことも浮かび上がってきた。景忠をはじめ、家重・家正・直隆・隆基・五郎兵衛・助三郎らが姉川合戦に参陣し、朝倉軍の殿として奮戦したものの、家重・家正・直隆・隆基・五郎兵衛ら一族の多くが討死するという大きな痛手を蒙った。真柄一族の勇姿が世上有名な十郎左衛門という名に仮託されて広く伝承されていったのも、こうした真柄一族の悲運が背景にあったのではないかと思われる。ただ、景忠や助三郎が合戦を潜り抜け、家氏や宮寿丸が合戦に参加せず生き延びたことは見逃すべきではない。景忠は志賀の陣にも参戦し、助三郎は朝倉氏滅亡後に富田長繁・織田信長・前田利家に仕え、家氏は朝倉氏滅亡後に長繁・不破光治・不破彦五郎・丹羽長秀に仕えて朝鮮で戦死し、宮寿丸は稲葉良通に引き取られ、医師の田代家を継ぎ、福井藩田代家として近世を迎えた。「武」で名を馳せた真柄氏は今度は「医」を武器にして近世を生き抜いていったのである。こうした「武の道」から「医の道」への転換も真柄氏の歴史を考えるうえで興味深い。

次に、これまで非常に有名であったにもかかわらず、良質な資料がなく、謎に包まれていた十郎左衛門の実態が見えてきたことも重要である。そもそも十郎左衛門家は庶流で、十郎左衛門を名乗った人物は、実は、二人いた。家正と嫡男の直隆である。戦国時代当時、武名を轟かせていたのは家正の方で、それも彼の若い時、十郎左衛門を名乗っていた時であった。家正は姉川合戦時にはすでに老将で、備中守を名乗り、十郎左衛門の号は直隆に譲っていた。姉川合戦で家正・直隆は戦死したが、「討捕頸之注文」を載せる信長記やそれを底本とする甫庵信長記では、「真柄備中守」と記されずに「真柄十郎左衛門」とのみ記されてしまった。そのために、「真柄十郎左衛門」が家正を指すのか、直隆を指すのか分からなくなり、後代には、家正と直隆の事績が一体となって「真柄十郎左衛門直隆」という人物に仮託されて伝承されていったと考えられる。換言すれば、後代の資料に記される「真柄十郎左衛門直隆」には、直隆だけでなく、家正の事績が含まれる可能性があることに注意しなければならない。そして、「真柄十郎左衛門直隆」の伝説が広まるにつれて、家正や嫡流の景忠をはじめとする真柄一族の存在が歴史の表舞台から忘れ去られていったのではないか。これこそ真柄氏の実像が掴みにくい要因の一つであろう。こうした点に加えて、姉川合戦で家正を討ち取った匂坂式部が、実は、のちに結城秀康に仕えて福井城下の毛屋町に住み、合戦の顛末を真柄一族（宮寿丸もしくは田代養山）に語っていたことも明らかとなった。とすれば、すでに江戸時代前期には、匂坂氏と真柄氏の和解は済んでいたのかもしれない。それと同時に、直隆を討ち取ったのが青木一重という可能性が高くなってきたのである。

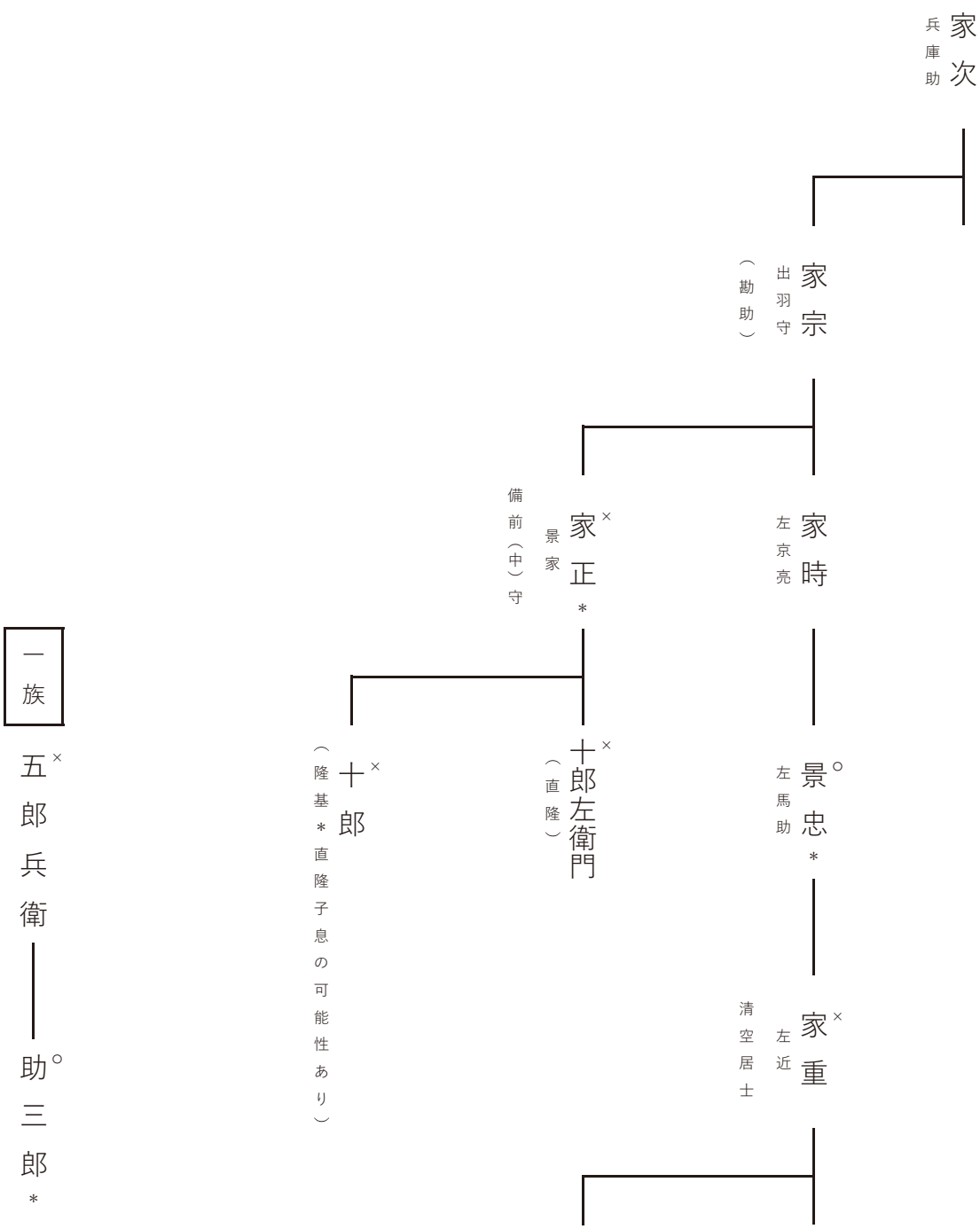
次いで、従来、十郎左衛門が使用したことで有名な大太刀の実態が判明したことも重要である。真柄氏と大太刀の関わりは、

「先陣真柄、太刀振真柄」と言われた家宗から始まり、それ以降代々、「野太刀ノ兵法」を相伝した。その兵法とは、大太刀で人を斬るというよりも、城門・塀・柵あるいは木戸・土蔵などを截り（断ち切り）破るものであった。ゆえに、真柄氏は先陣を任されることが多かったのである。また、こうした大太刀は、十郎左衛門だけでなく、他の真柄一族も使用した。姉川合戦では、少なくとも、景忠・家重・家正が同時に大太刀を振った。この点に加え、「野太刀持」なる従者が大太刀を持ち運ぶことで、一人の武将が複数の大太刀を戦場に持ってきた可能性がある点も踏まえると、真柄一族の大太刀が（世上有名な十郎左衛門の大太刀と喧伝されて）各地に伝来していても不自然ではないと分かったのである。

以上が本稿の成果となるが、最後に、宮寿丸すなわち田代養仙から、養仙の嫡男で覚書の作者である養山へと続いた、福井藩田代家のその後に触れて、稿を閉じたい。田代家系図・諸士先祖之記などによれば、養山の長男の養元が関東の田代本家を継ぎ、次男の道伯が福井藩田代家を継いだ。しかし、道伯が延宝七年（一六七九）に死去し、嗣子がなかったため、福井藩田代家は断絶の危機に瀕した。そこで、養元が田代本家から出戻り、再び福井藩に仕え、その危機を脱したかに見えた。しかし、養元の子は延宝元年に早世していたため、結局は元禄十五年（一七〇二）に福井藩士久世家から養子が迎えられ、福井藩田代家は存続することとなった。以上の経緯からすると、真柄氏の正統な血脈は養元・道伯の代で途絶えたように見える。彼らの父の養山は、養元の子が早世し、道伯に嗣子がなく、真柄氏の血脈が絶えることを予感したため、この覚書を作成したのではあるまいか。かくして、養山は真柄氏の系譜と事績を丹念に記した覚書を作成し、元禄十年に死去したのである。

【系図】覚書から分かる真柄氏

（　）内は筆者の補注
＊は一次資料で確認できる人物
○は姉川合戦に参陣、×は姉川合戦で討死した人物



【地図】真柄氏の屋敷跡との伝承が残る場所

(1) とくに、当館蔵の姉川合戦図屏風（天保八年（一八三七）成立）は、姉川合戦を描いた唯一の屏風で、そこには、真柄十郎左衛門の大太刀を振り回す様子が描かれている。
(2) 松原信之『越前朝倉氏の研究』吉川弘文館、二〇〇八年。
(3) 保阪潤治氏所蔵文書（『福井県史』資料編二、一九八六年）。
(4) 真宗寺文書（牧野信之助編『越前若狭古文書選』三秀舎、一九三三年）。
(5) 『福井市史』資料編二、一九八九年。
(6) 『福井市史』資料編二。
(7) 国書刊行会編・発行『史籍雑纂』二、一九一一年。
(8) 西鳥羽大平家文書（『鯖江市史』史料編三、一九八八年）。
(9) 『越前市史』資料編三、二〇二一年。
(10) 田代家文書は、福井藩田代家に関わる系図・由緒書、福井藩主からの知行宛行状、近世初期の諸大名からの書状類、家業の医学関係資料、福井県庁・福井済世会に関する資料などからなり、田代三喜の流れを汲む田代家および福井藩（県）医学史の研究にとっても重要である。現在、当館で整理を行っている最中である。
(11) 福井市立郷土歴史博物館編・発行『足羽山の主な史跡と墓碑石』一九八八年。
(12) 福井市立郷土歴史博物館編・発行『足羽山の主な史跡と墓碑石』。
(13) 松平文庫蔵（福井県文書館保管）。なお、同じく松平文庫蔵（福井県文書館保管）の福井藩士履歴（明治六年（一八七三）以前に成立）では、田代家を確認できるが、養仙・養山の名は見えない。
(14) 長野栄俊「貞享期における越前松平家の家史編纂―「家譜」「世譜」編纂前史―」（福井県郷土誌懇談会編・発行『若越郷土研究』五十三―二、二〇〇九年）によれば、野治（路とも）汝謙は、寛文八年（一六六八）に福井藩儒として召し抱えられ、越前松平家の家史など多数の歴史書を編纂した人物である。この野治が朝倉記を集譔する際に覚書を参照したようである。朝倉記を称する類本は複数存在するが、その一つに野治が関わっていたと判明する。
(15) 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編『寛政重修諸家譜』六、続群書類従完成会、一九六四年。
(16) 朝日新聞社編・発行『朝日日本歴史人物事典』一九九四年。
(17) いずれも松平文庫蔵（福井県文書館保管）。
(18) 当館蔵。
(19) 松平文庫蔵（福井県文書館保管）。
(20) 東京大学史料編纂所編『大日本史料』十―四、東京大学、一九八七年。
(21) 『越前市史』資料編三。
(22) 水藤真「『朝倉盛衰記』（下）」（『一乗谷史学』別冊六、一九七七年）。
(23) いずれも松平文庫蔵（福井県文書館保管）。越前地理指南は、杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書』上（松見文庫、一九七一年）に翻刻されている。
(24) 『武生市史』資料編八、一九八七年。
(25) 竹内理三編『増補続史料大成』二十三、臨川書店、一九七八年。
(26) ただし、蔭涼軒日録（竹内理三編『増補続史料大成』二十五、臨川書店、一九七八年）によれば、朝倉氏は、延徳三年（一四九一）の段階で、貞景の一乗衆五千、景冬の敦賀兵三千、慈視院光玖の大野兵二千、合わせて一万人の軍勢を保有していたとされ、一万という数値はあながち誇張ではない可能性もある。
(27) 松原信之『越前朝倉一族』新人物往来社、一九九六年。
(28) 斎藤槻堂『ふるさと味真野』武生市味真野公民館、一九七九年。
(29) 杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』松見文庫、一九八〇年。
(30) 青山幹哉「十八世紀系図家の描く中世像―長慶寺所蔵「山田世譜」の分析―」（『名古屋大学文学部研究論集　史学』百三十四、一九九〇年）。
(31) 『武生市史』資料編八。
(32) 『越前市史』資料編三。
(33) 『福井県今庄町誌』一九七九年。

(34) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編・発行『朝倉氏の家訓』二〇〇八年。
(35) 笠原一男・井上鋭夫『日本思想体系十七　蓮如　一向一揆』岩波書店、一九七二年。
(36) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編・発行『越前・朝倉氏関係年表』二〇一〇年。
(37) 東京大学史料編纂所編『大日本史料』十―四。
(38) 岡山大学附属図書館ホームページ（https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/ikedake/komonjo/ja　2022/1/12閲覧）。
(39) 石田善人「信長記十五巻解題」（岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』福武書店、一九七五年）。
(40) たとえば、藤本正行『信長の戦国軍事学』JICC出版局、一九九三年。
(41) 近藤瓶城編『史籍集覧』十一、近藤出版部、一九二六年。
(42) 港区立郷土歴史館ホームページ（https://www.minato-rekishi.com/museum/2009/10/141.html　2022/1/12閲覧）によれば、青木家の菩提寺である瑞聖寺には、一重が討ち取った真柄の野郎頭兜が伝来する。本稿からすれば、これは家正嫡男（直隆）のものと推定される。
(43) 十郎左衛門家に関する系図として、越後塩俵真柄家の系図（真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』一九三二年）のほか、いくつかの系図（不老区編・発行『北陸の豪勇・真柄十郎左衛門と大太刀、そして、その一族と産業の関わり』二〇〇一年）が知られる。
(44) 二木謙一監修『明智軍記』新人物往来社、一九九五年。
(45) 成立年代が比較的古い可能性がある真柄十郎左衛門家関連資料として以下のものが知られる。朝倉家録（天正五年（一五七七）成立ヵ、富山県立図書館ホームページ（http://www.lib.pref.toyama.jp/gallery/collection/intro.aspx?isnvmngcd=1.93　2022/1/12閲覧））には、上巻の巻頭（朝倉軍談の巻頭）に「越之前州朝倉家臣真柄十郎左衛門直隆孫真柄隆久者於越之府中所著作」、下巻の途中（朝倉家之系図の末尾）に「天正五年丁丑四月前越州亡臣真柄十郎左衛門尉直隆孫真柄夢宅斎隆久八十歳而拾遺而書記」、下巻の末尾（朝倉家記の末尾）に「天正五年丁丑四月前越州亡臣真柄十郎隆基一子真柄夢宅斎隆久謹書」とあり、越州軍記にも、「天正五年四月中旬夢宅八十歳書之」とあり、真柄夢宅斎隆久という人物が登場する。これらによれば、直隆―隆基―隆久という系譜になり、直隆と隆基は親子関係である。しかしながら、隆久が仮に天正五年で八十歳だとすれば、明応七年（一四九八）生まれで、家正に近い世代の人物となり、矛盾が生じる。ゆえに、これらの記述をどの程度信頼できるのか不明としか言いようがない。これに関して、松原氏は、加賀松任に住した真柄家の過去帖では、寛文十年（一六七〇）に死去した法身院殿道因宗賢居士を夢宅斎隆久とすると紹介したうえで、この人物については検討を要すると述べている（「朝倉貞景と斯波義寛との越前国宗主権をめぐる抗争について」（富山県郷土史会編・発行『朝倉家録』一九八二年））。また、白崎昭一郎氏は、天正年間に朝倉氏の亡臣で朝倉家の公式記録を所持していた集団が存在し、彼らが真柄夢宅斎隆久なる人物に仮託して朝倉家録や越州軍記を作成したと推定している（「勃興期朝倉氏に関する二・三の問題点」（富山県郷土史会編・発行『朝倉家録』））。
(46) 朝倉盛衰記には、興徳寺から届いた享保四年（一七一九）の書付が記されており、「声教院相阿弥陀仏〈元亀元庚午六月廿八日、俗名真柄十郎左衛門〉、識阿弥陀仏〈元亀元庚午六月廿八日、俗名真柄十郎〉、漢阿弥陀仏〈年号月日不知、真柄十郎弟新十郎〉、右江州姉川戦死、十郎左衛門ハ朝卯刻、十郎ハ同日晩申ノ刻也、新十郎ハ死去之儀ハ分明ニ知不申候、元亀元年ヨリ今至享保四己亥年百五十年、右ハ宮谷光（興）徳寺ヨリ書付来ル、真柄十郎左衛門父子戒名也」（〈　〉内は割書き）とある。これを覚書・朝倉盛衰記の内容に従って解釈するならば、声教院相阿弥陀仏が備中守家正、識阿弥陀仏が十郎左衛門直隆、漢阿弥陀仏が十郎隆基と見なしうる。また、興徳寺には、「声教院相阿弥陀仏」の位牌、「漢阿弥陀仏・識阿弥陀仏」連名の位牌（享保四年修復、天保二年（一八三一）再建）が残る。後者の連名の順番が（向かって右側から）漢阿弥仏・識阿弥陀仏とある点からすると、右

の書付の識阿弥陀仏と漢阿弥陀仏の関係は逆である可能性がある。なお、斎藤槻堂『ふるさと味真野』では、声教院相阿弥陀仏が直隆、漢阿弥陀仏が直隆弟の直澄、識阿弥陀仏が隆基と見なしている。直澄については、越後塩俵真柄家の系図（真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』）などで直隆の弟として登場する人物であるが、一次資料では確認できず、以下のように、直隆の誤伝である可能性もある。すなわち、慶応三年（一八六七）刊行の太平記英勇伝「真柄十郎左衛門直澄」（江戸幕府による浮世絵統制をかいくぐるため、武将の実名を隠して変名を使った偽名絵の一種で、直隆を直澄としたもの）の影響や、「隆」と「澄」の字の崩し方が似ていることによる誤読の影響を受けた可能性である。仮にそのように考えた場合、家正・直隆・隆基という三人がいたが、家正と直隆が一体化して伝承されたことを受け、直澄という人物が創出され、直隆・直澄・隆基という三人になったと見ることもできる。

(47) 『敦賀郡誌』一九一五年。

(48) 元亀元年（一五七〇）の姉川合戦で直隆が戦死した時の年齢については、巷説では三十五歳（天文五年（一五三六）生まれ）とされるが、真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』では五十九歳（永正九年（一五一二）生まれ）とされる。後者の場合、年齢的には家正を指す可能性もある。また、隆基が戦死した時の年齢は、四十三歳（真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』）、二十四歳（同上）、二十歳（朝倉始末記）、十七歳（甫庵信長記）など諸説ある。同年の金ヶ崎合戦で直澄が戦死した時の年齢は、四十二歳（真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』）とある。以上のように、十郎左衛門家については、家正を除いて一次資料がなく、諸説も多くあり、詳細不明な点が多い。

(49) 興徳寺編『真柄』六、真柄十郎左衛門顕彰会、一九八四年。

(50) 真柄佐一郎直孝編・発行『姉川』、不老区編・発行『北陸の豪勇・真柄十郎左衛門と大太刀、そして、その一族と産業の関わり』。

(51) 横川栄編・発行『沓見誌』（一九七九年）などによれば、沓見には、真柄屋敷跡、真柄氏の守護神である西神社、西神社にある真柄氏ゆかりの牛石などが伝わっている。

(52) 覚書・新撰豊臣実録（本文後述）によれば、家子の川瀬氏のうち、市右衛門・三郎兵衛は姉川合戦・志賀の陣・一向一揆との戦いに参加し、又作は一向一揆との戦い・美濃北方合戦に参加した。なかでも、三郎兵衛は大力の「野太刀持」で、常人が数人で持つ大太刀を担いで持ち、姉川合戦では景忠が戦死したと勘違いして大太刀の鞘を打ち捨てたとされる。なお、地元の伝承では、河瀬三郎左衛門が姉川合戦で討死した真柄十郎左衛門父子の亡骸を葬ったという（北新庄地区自治振興会ホームページ（http://www4.ttn.ne.jp/~kita-shin/profile/magaratyou.htm 2022/1/12閲覧））。

(53) 平凡社編・発行『日本歴史地名大系』十八、一九八一年。

(54) 覚念は曹洞宗の開祖である道元の俗弟子で、彼が戦国時代の北村真柄氏の先祖であるという。なお、坂井市の東尋坊の伝承に登場する、平泉寺僧の真柄覚念とは別人であろう。

(55) 城迹考には、真柄勘助・真柄主税の他、「真柄十郎左衛門　上真柄村ヨリ辰巳ノ方畑ノ内ニ在」、「真柄十郎左衛門　一乗谷東新町村北方ノ方田畑ノ内ニ在」とあり、「真柄十郎左衛門」が上真柄村と一乗谷に住んでいたとされる。ただし、この「真柄十郎左衛門」が家正を指すのか、直隆を指すのか、あるいは、真柄氏に関する伝承が世上有名な真柄十郎左衛門という名に仮託されたものかは不明である。

(56) 佐藤圭「姉川合戦の事実に関する史料的考察」（福井県郷土誌懇談会編・発行『若越郷土研究』五十九―一、二〇一四年）。

(57) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編・発行『越前・朝倉氏関係年表』二〇一〇年。

(58) 東京大学史料編纂所編『大日本史料』十一―一、東京大学、一九二七年。

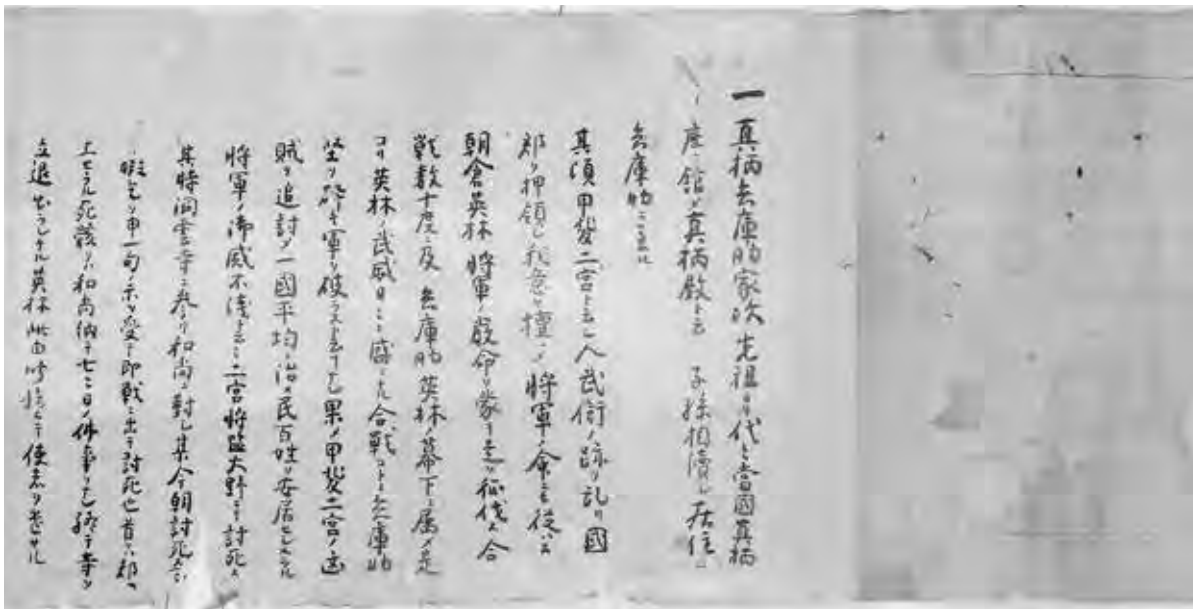
(59) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』四、吉川弘文館、一九八四年。

(60) 中谷藤作氏旧蔵文書（加能史料編纂委員会編『加能史料』戦国十七、石川県、二〇一九年）。

(61) 三輪家伝書（前田育徳会編『加賀藩史料』一、清文堂出版、一九七〇年）。
(62) 福井市立郷土歴史博物館編・発行『合戦』二〇一四年。
(63) 青山幹哉「十八世紀系図家の描く中世像」では、山田世譜に登場する真柄備中守家正について、真柄十郎左衛門をモデルとした架空の人物としたうえで、甫庵信長記に記される、十郎左衛門と戦った匂坂家郎従の山田宗六なる山田姓の人物をもとにして、山田吉久が家正を斬ったというエピソードが創作されたとする。ただ、朝倉義景亭御成記・覚書からすれば、家正は架空の人物ではなく、吉久が家正を斬ったという部分のみ創作された可能性が高い。
(64) 福井款彦「当宮所蔵　真柄太刀考」（熱田神宮編・発行『あつた』百五十八号、一九九一年）。
(65) 内藤東甫『張州雑志』八、愛知県郷土資料刊行会、一九七六年。
(66) 福井款彦「当宮所蔵　真柄太刀考」。
(67) 金沢大学編『白山史料集』上、石川県図書館協会、一九七九年。
(68) 興徳寺編『真柄』十、真柄十郎左衛門顕彰会、一九八八年。
(69) 福井市立郷土歴史博物館編・発行『合戦』。
(70) 福井市立郷土歴史博物館編・発行『合戦』。なお、似た内容を持つ匂坂氏子孫の伝承（小和田哲男監修『徳川家臣団子孫たちの証言』静岡新聞社、二〇一五年）も知られる。
(71) 当館蔵。
(72) 森恒救『福井藩史話』二、歴史図書社、一九八〇年。
(73) 萩原正基編・発行『味真野通誌』一九一〇年。
(74) 福永酔剣『日本刀大百科事典』雄山閣出版、一九九三年。

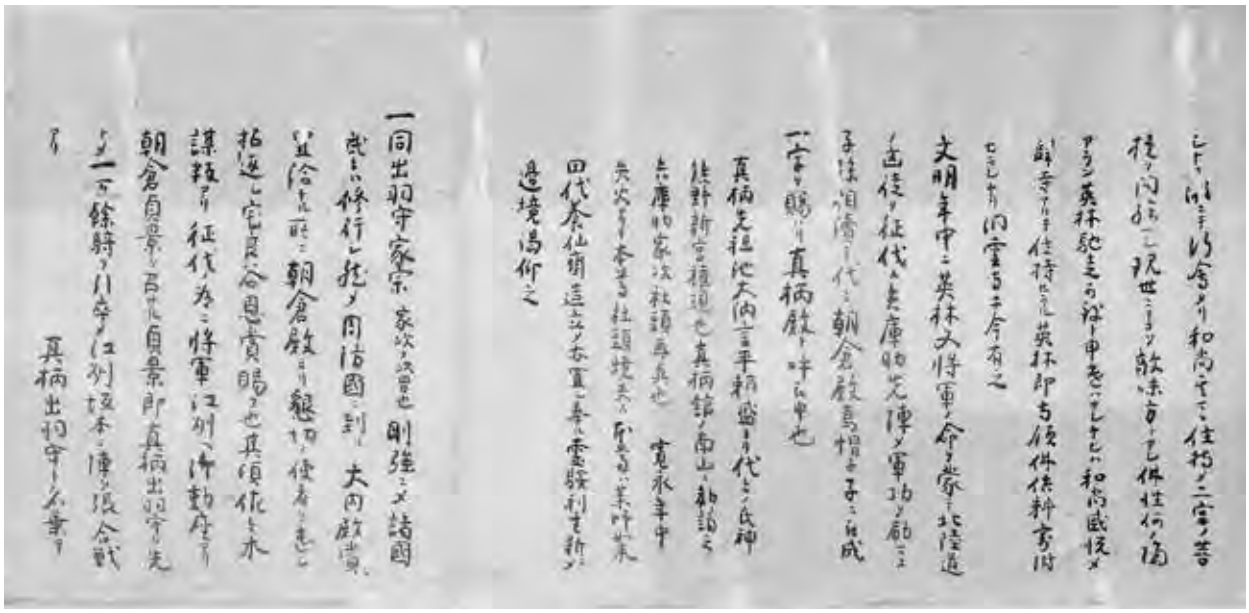
［付記］
成稿にあたり、石川美咲氏・大平能成氏・奥山哲也氏・亀田剛広氏・川上浩司氏・上月智也氏・佐藤圭氏・高早恵美氏・中野史生氏・西島太郎氏・林奈々氏・坂東佳子氏・平野俊幸氏・藤塚久勝氏・室井克俊氏・藪雄二氏をはじめとする皆様には多大なるご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

【写真】真柄氏家記覚書



【翻刻文】

一、真柄兵庫助家次先祖ヨリ代々当国真柄
庄ニ館シテ真柄殿ト云、子孫相続シ居住□
兵庫助ニ至ル、
其頃甲斐・二宮ト云シ人武衛ノ跡ヲ乱リ国
郡ヲ押領シ我意ヲ擅ニシテ将軍ノ命ニモ従ハス、
朝倉英林将軍ノ厳命ヲ蒙テ是ヲ征伐ス、合
戦数十度ニ及、兵庫助英林ノ幕下ニ属シテ是
ヨリ英林ノ武威日々ニ盛ニナル、合戦コトニ兵庫助
堅ヲ砕キ軍ヲ破ラスト云コトナシ、果シテ甲斐・二宮ノ凶
賊ヲ追討シテ一国平均ニ治メ民百姓ヲ安居セシメラル、
将軍ノ御威不浅ト云々、二宮将監大野ニテ討死ス、
其時洞雲寺ニ参リ和尚ニ対シ某今朝討死スヘシ
□暇乞ヲ申、一句ノ示ヲ受テ即戦ニ出テ討死也、首ヲハ都へ
上セラル、死骸ヲハ和尚納テ七々日ノ仏事ヲナシ終テ寺ヲ
立退出ラレケル、英林此由聞給ヒテ使者ヲ遣サル、



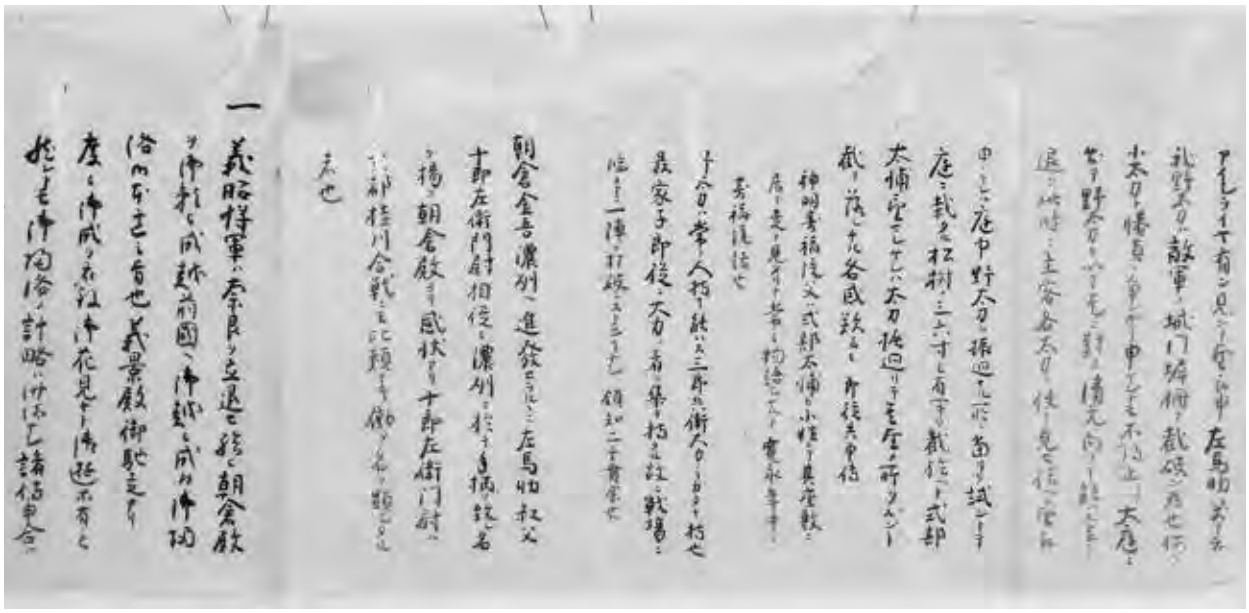
［　］瀬ニテ行会タリ、和尚其マヽ、住持シテ二宮ノ菩
提ヲ問給ヘシ、現世ニテコソ敵味方トアレ仏性何ノ備
アラン、英林馳走可致ト申遣ハサレケレハ和尚感悦シテ
帰寺アリテ住持セラル、英林即寺領仏供料寄附
セラレケリ、洞雲寺于今有之、
文明年中ニ英林又将軍ノ命ヲ蒙テ北陸道
ノ凶徒ヲ征伐ス、兵庫助先陣シテ軍功ヲ励マス、
子孫相続テ代々朝倉殿烏帽子ニ被成
一字ヲ賜ハリ真柄殿ト呼被申也、
真柄先祖池大納言平頼盛ヨリ代々ノ氏神
熊野新宮権現也、真柄館ノ南山ニ勧請之、
兵庫助家次社頭再興也、寛永年中
失火アリテ本尊社頭焼失ス、本尊ハ薬師如来、
田代養仙斎造立シテ安置シ奉ル、霊験利生新ニシテ
辺境渇仰之、

一、同出羽守家宗家次カ次男也剛強ニシテ諸国
武者修行シ然シテ周防国ニ到ル、大内殿賞シ
置給ケル所ニ朝倉殿ヨリ懇切ノ使者ヲ遣シ
招返シ宅良谷恩賞賜フ也、其頃佐々木
謀叛アリ、征伐ノ為ニ将軍江州へ御動座アリ、
朝倉貞景ヲ召サル、貞景即真柄出羽守ヲ先
トシテ一万余騎ヲ引卒シテ江州坂本ニ陣ヲ張、合戦
アリ、　　真柄出羽守ト名乗テ

八尺ノ大太刀ヲ提テ先登ニ進ミ大勢ノ中ヘ馳
入テ敵陣ヲ截破リ諸軍ノ目ヲ驚シ将軍
ノ御感ニ預ル也、遂ニ佐々木打負テ逃亡ス、
又永正年中ニ佐々木謀叛ス、将軍江州ヘ
御動座アツテ征伐セサセ給フニ戦ニ利ナクシテ
却難儀ニ及給フ、朝倉孝景軍勢ヲ催
江州ヘ進発シテ相戦テ佐々木敗北ス、此合戦ニ
真柄出羽守手柄粉骨無比類ト朝倉殿
感状アリ、然レハ真柄勇力ト天下ニ名ヲ揚
至今、坂本児童ノ諺ニ先陣真柄太刀振
真柄ト云ハ出羽守カ事也、野太刀ノ兵法是ヨリ始、
出羽守カ子二人アリ、嫡子左京亮家時・
次男十郎左衛門尉家正又景家後ニ備前守ト云、

一、同左京亮家時家宗カ子也仏神信心ニシテ慈悲
ナル人、

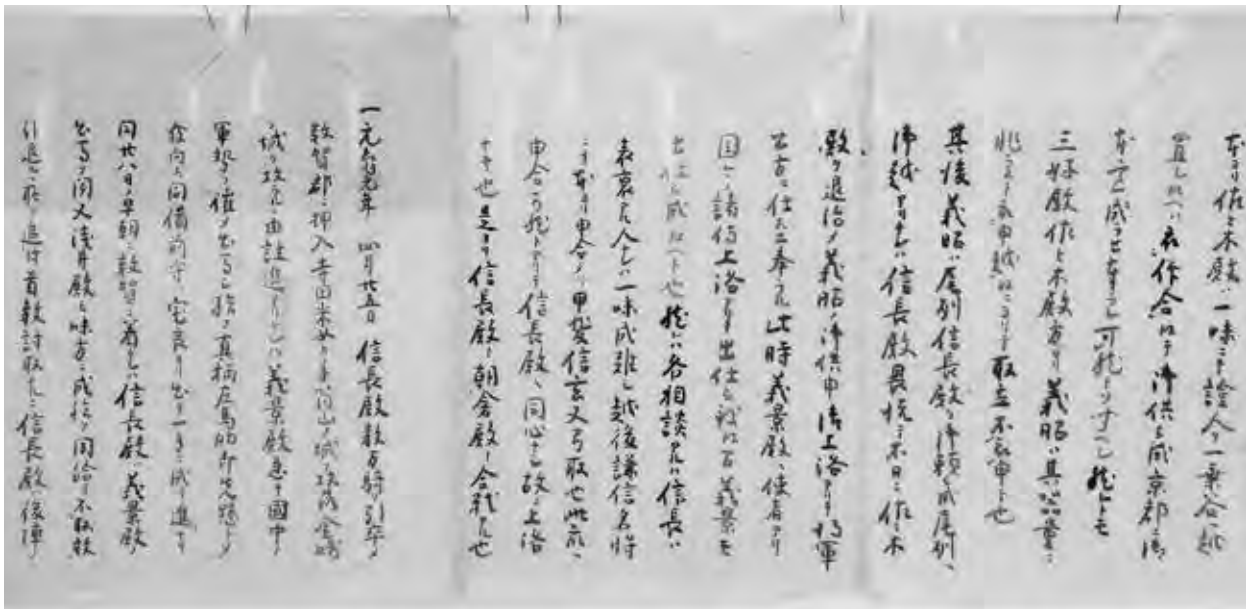
一、同左馬助景忠家時カ子也其長高ク鬚多シ、
力量父祖ニ超越ス、府中鍛冶ノ千代鶴ヲ召テ仮
屋ヲシテ三所ニフイゴウヲ立テ野太刀ヲ造ラシム、長
一丈中込四尺みねノ重一寸二分其後十分ハ恐レ
アリトテ一寸摺上テ九尺九寸トス、是ヲ太郎太刀ト名付、
又八尺ニ造ラシメテ次郎太刀ト名付、兵法達者ニシテ
打所分寸ヲ失ハス、常ニ鑓長刀ヲ相手ニシテ便ニ仕
合フ、其場ハ即新宮権現御前也、於当困
兵法達者ハ戸田・山崎・印牧等也、此野太刀ニハ
不相対ト云々、或時朝倉式部太輔所ニテ戸田
清元小太刀ナレハ長短一味ノ位ヲ申ケルニ各野太刀ニ



アイシライヤ有ニ見ント望被申、左馬助哭テ云、
我野太刀ハ敵軍ノ城門・塀・柵ヲ截破ン為也、何ソ
小太刀ト勝負ヲ争ンヤト申ケレトモ不得止コトヲ、大庭ニ
出テ野太刀ヲ以テ是ニ対ス、清元向フコト能ハスト云テ
退ク、此時ニ主客各太刀ヲ使テ見セ給ヘト望被
申ケレハ庭中野太刀ヲ振廻ナル所ニ当リヲ試ントテ
庭ニ栽タル松樹ノ三六寸モ有ヘキヲ截給ヘト式部
太輔望マレケレハ太刀振廻リテ其望ノ所ヲズンド
截テ落シケル、各感歎云々、郎従共申伝、
神明寿福院父ハ式部太輔カ小姓ニテ其座敷ニ
居テ是ヲ見タリト常々物語シケルト寛永年中ニ
寿福院話也、
野太刀ハ常ノ人持コト能ハス、三郎兵衛大力ニテカタケ持也、
最家子郎従ニ大力ノ者ヲ集テ持タル故ニ戦場ニ
臨コトニ一陣ヲ打破ラスト云コトナシ、領知二千貫余也、

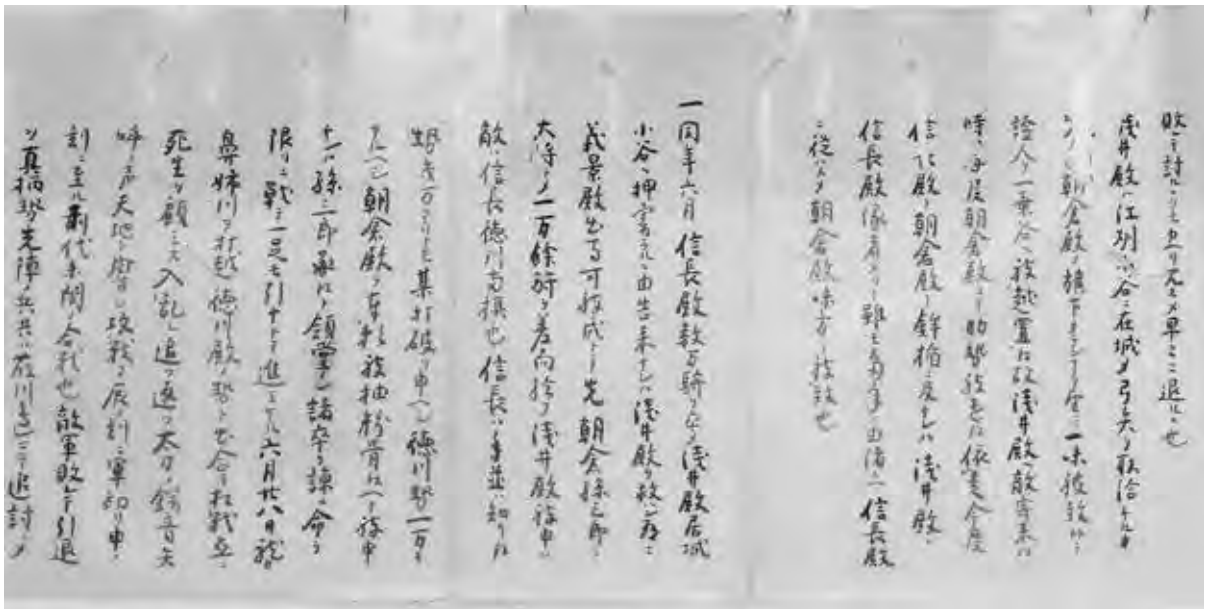
朝倉金吾濃州ヘ進発セラル、ニ左馬助叔父
十郎左衛門尉相従ヒ濃州ニ於テ手柄ヲ致シ名
ヲ揚ク、朝倉殿ヨリ感状アリ、十郎左衛門尉ハ
京都桂川合戦ニモ比類ナキ働シテ名ヲ顕シタル
者也、

一、義昭将軍ハ奈良ヲ立退セ給ヒ朝倉殿
ヲ御頼被成越前国ヘ御越被成候、御帰
洛御本意之旨也、義景殿御馳走アリ、
度々御成ヲ被致御花見ナト御遊等有之、
然レトモ御帰洛ノ計略ハ沙汰ナシ、諸侍申合ハ



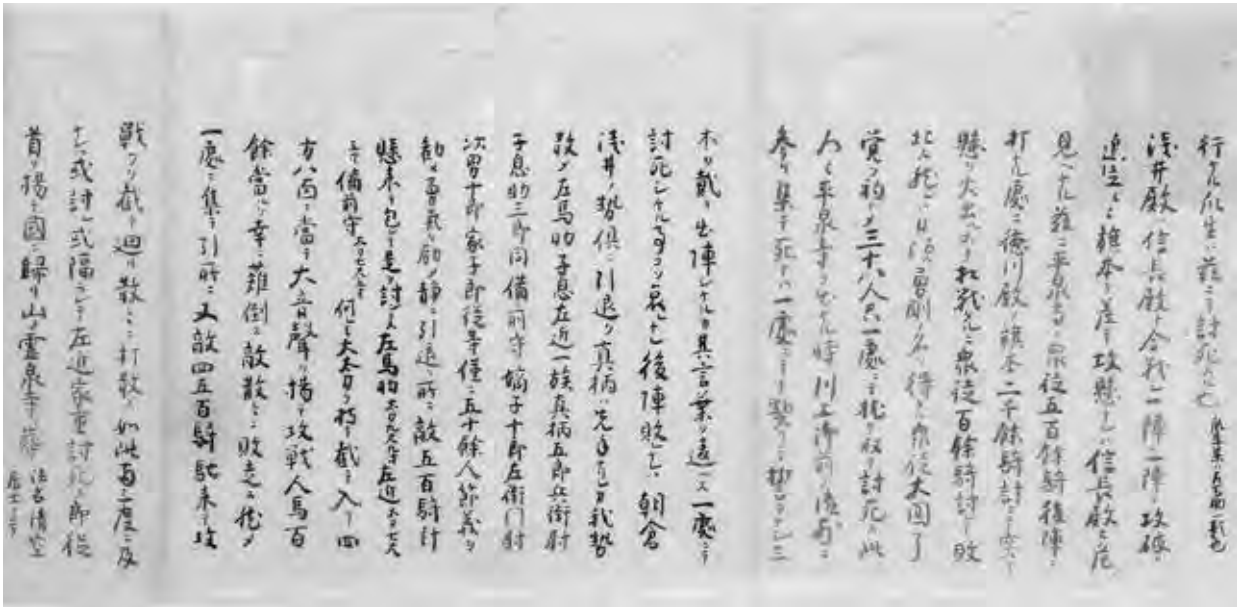
本ヨリ佐々木殿ハ一味ニテ証人ヲ一乗谷ヘ越
置レ候ヘハ被仰合候テ御供被成京都ニ御
本意成ラセ奉ラレ可然トソ聞ヘシ、然レトモ
三好殿佐々木殿方ヨリ義昭ハ其器量ニ
非ラスト被申越候ニヨリテ取立不被申ト也、
其後義昭ハ尾州信長殿ヲ御頼被成尾州ヘ
御越アリケレハ信長殿畏悦テ不日ニ佐々木
殿ヲ退治シテ義昭ノ御供申、御上洛アリテ将軍
公方ニ仕スエ奉ラル、此時義景殿ヘ使者アリ、
国々ノ諸侍上洛アリテ出仕被致候旨義景モ
出仕被成候ヘト也、然レハ各相談アルハ信長ハ
表裏アル人ナレハ一味成難シ、越後謙信名将
ニテ本ヨリ申合タリ、甲斐信玄又弓取也、此衆ヘ
申合可然トアリテ信長殿ヘ同心ナシ故ニ上洛
ナキ也、是ヨリ信長殿ト朝倉殿ト合戦アル也、

一、元亀元年四月廿五日信長殿数万騎ヲ引卒シテ
敦賀郡ニ押入、寺田采女カ手筒山ノ城ヲ攻落、金崎
ノ城ヲ攻ラル、由註進アリケレハ義景殿急キ国中ノ
軍勢ヲ催シテ出馬シ給フ、真柄左馬助即先懸トシテ
発向ス、同備前守ハ宅良ヨリ出テ一手ニ成テ進ミケリ、
同廿八日ノ早朝ニ敦賀ニ着ケレハ信長殿ハ義景殿ノ
出馬ヲ聞又浅井殿モ味方ニ成給ヲ聞給テ不取敢
引退ル、所ヲ追付、首数討取ケルニ信長殿ハ後陣ノ



敗レテ討ル、ヲモカヘリ見スシテ早々ニ退ル、也、
浅井殿ハ江州小谷ニ在城シテ弓矢ヲ取給ケルカ
先年朝倉殿ノ旗下タランコトヲ望ミ一味被致候テ
証人ヲ一乗谷ヘ被越置候故浅井殿ヘ敵寄来候
時ハ毎度朝倉殿ヨリ助勢被遣候、依是今度
信長殿ト朝倉殿ト鉾楯ニ及ケレハ浅井殿ハ
信長殿縁者タリト雖モ多年ノ由緒ユヘニ信長殿
ニ従ハスシテ朝倉殿味方ヲ被致也、

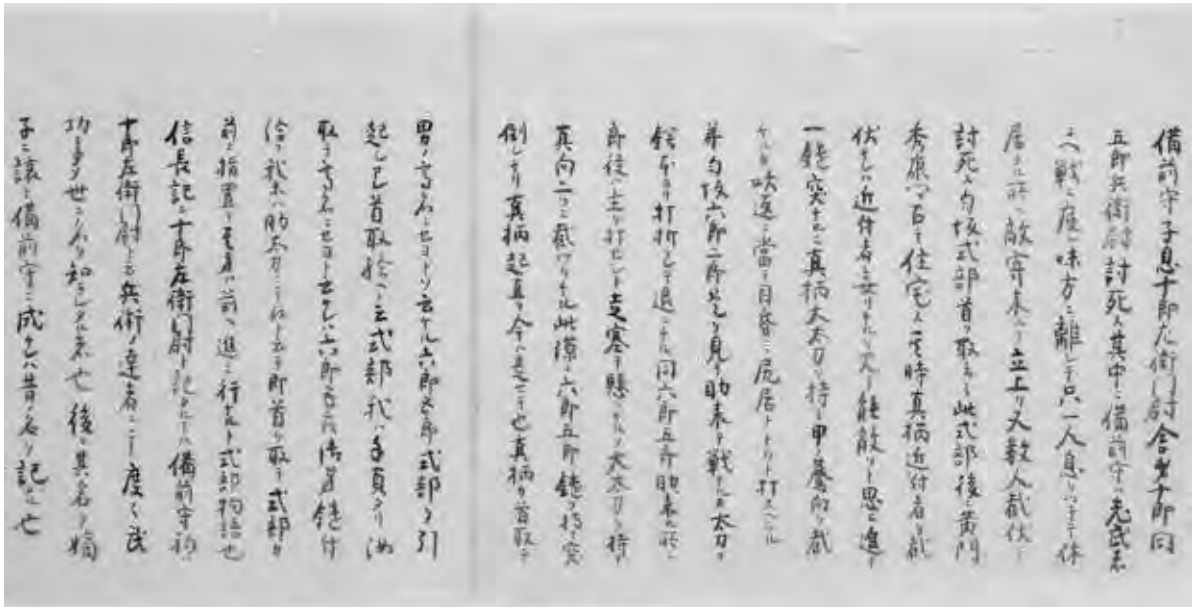
一、同年六月信長殿数万騎ヲ卒シテ浅井殿居城
小谷ヘ押寄ラル、由告来ケレハ浅井殿ヲ救ハン為ニ
義景殿出馬可被成トテ先朝倉孫三郎ヲ
大将トシテ一万余騎ヲ差向給フ、浅井殿被申ハ
敵ハ信長徳川両旗也、信長ハ手並ハ知リ候、
勢幾万アリトモ其打破リ申ヘシ、徳川勢一万モ
アルヘシ、朝倉殿ヲ奉頼被抽粉骨候ヘト被申
ケレハ孫三郎承候ト領掌シ諸卒ヲ諫メ命ヲ
限リニ戦テ一足モ引ナトテ進ミケル、六月廿八日龍カ
鼻姉川ヲ打越、徳川殿ノ勢ト出合テ相戦、互ニ
死生ヲ顧ミズ入乱レ追ツ返ツ太刀ノ鍔音矢
叫ノ声天地ヲ響シ攻戦フ、辰ノ刻ニ軍初リ申ノ
刻ニ至ル、前代未聞ノ合戦也、敵軍敗レテ引退
ヲ真柄勢先陣ノ兵共ハ藤川辺マテ追討ニシテ



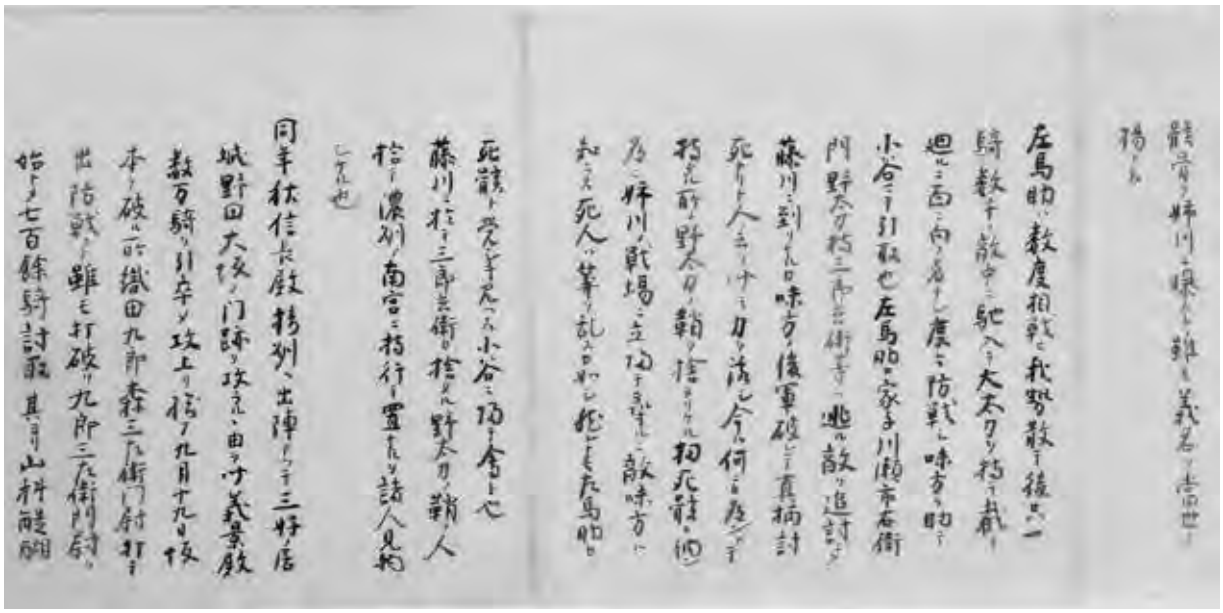
行ケル、瓜生ハ茲ニテ討死スル也瓜生某ハ左馬助一類也、
浅井殿ハ信長殿ト合戦シ一陣二陣ヲ攻破リ
追立云々、旗本ヲ差テ攻懸ケレハ信長殿モ危ク
見ヘケル、茲ニ平泉寺ノ衆徒五百余騎後陣ニ
打ケル処ニ徳川殿ノ旗本二千余騎計ニテ突テ
懸リ火出ルホト相戦タルニ衆徒百余騎討レテ敗
北ス、然レハ日頃勇剛ノ名ヲ得タル衆徒大円了
覚ヲ初トシテ三十八人只一処ニテ枕ヲ双テ討死ス、此
人々平泉寺ヲ出ケル時川上御前ノ御前ニ
参リ集テ死ナハ一処ニテト契リテ誓ヲナシ三

木ヲ戴テ出陣シケルカ其言葉ヲ違ヘス一処ニテ
討死シケル事コソ哀レナレ、後陣敗レケレハ朝倉
浅井ノ勢倶ニ引退ク、真柄ハ先手ナリシカ我勢
散シテ左馬助・子息左近・一族真柄五郎兵衛尉
・子息助三郎・同備前守・嫡子十郎左衛門尉・
次男十郎・家子郎従等僅ニ五十余人節義ヲ
勧メ勇気ヲ励シテ静ニ引退ク所ニ敵五百騎計
懸来テ包ンテ是ヲ討ントス、左馬助太刀九尺九寸・左近太刀七尺
五寸・備前守太刀七尺五寸何レモ大太刀ヲ持テ截テ入リ四
方八面ニ当テ大音声ヲ揚テ攻戦人馬百
余当ルヲ幸ニ薙倒ス、敵散々ニ敗走ス、然シテ
一処ニ集テ引所ニ又敵四五百騎馳来テ攻

戦フヲ截テ廻リ散々ニ打散ス、如此両三度ニ及
ケレハ或討レ或隔ラレテ左近家重討死ス、郎従
首ヲ掲テ国ニ帰リ山ノ霊泉寺ニ葬法名清空居士ト号、

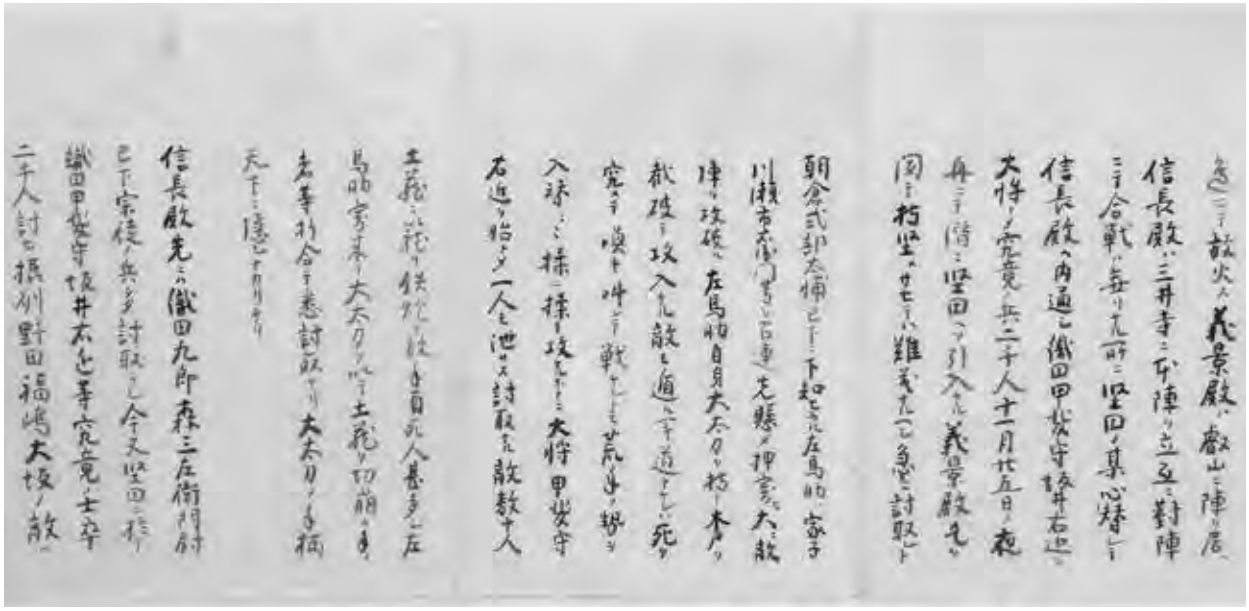


備前守・子息十郎左衛門尉・舎弟十郎・同
五郎兵衛尉討死ス、其中ニ備前守ハ老武者
ユヘ戦ヒ疲レ味方ニ離レテ只一人息ヲツキテ休
居タル所ヘ敵寄来ルヲ立上リ又数人截伏テ
討死ス、匂坂式部首ヲ取云々、此式部後ニ黄門
秀康卿召テ住宅ス、其時真柄近付者ヲ截
伏ケレハ近付者無リケルヲ見テ能敵ソト思ヒ進テ
一鑓突ケルニ真柄大太刀ヲ持テ甲ノ鬱向ヲ截
ケルカ吹返ニ当テ目昏ミ尻居トトウト打スヘラル、
弟匂坂六郎二郎是ヲ見テ助来テ戦ケルカ太刀ヲ
鍔本ヨリ打折ラレテ退ニケル、同六郎五郎助来ル所ニ
郎従ハ主ヲ打セシト走塞テ懸リケルヲ大太刀ヲ持テ
真向二ツニ截ワリケル、此隙ニ六郎五郎鑓ヲ持テ突
倒シケリ、真柄起直リ今ハ是マテ也、真柄カ首取テ
男ノ高名ニセヨトソ云ケル、六郎五郎式部ヲ引
起シアレ首取給ヘト云、式部我ハ手負タリ、汝
取テ高名ニセヨト云ケレハ六郎五郎御身鑓付
給フ、我等ハ助太刀ニテ候ト云テ即首ヲ取テ式部カ
前ニ指置テ其身ハ前ヘ進ミ行ケルト式部物語也、
信長記ニ十郎左衛門尉ト記タルコトハ備前守初ハ
十郎左衛門尉ト云、兵術ノ達者ニテ度々武
功多シテ世ニ名ヲ知ラレタル者也、後ニ其名ヲ嫡
子ニ譲テ備前守ニ成ケレハ昔ノ名ヲ記タル也、



骸骨ヲ姉川ニ曝スト雖モ義名ヲ当世ニ
掲ト云、

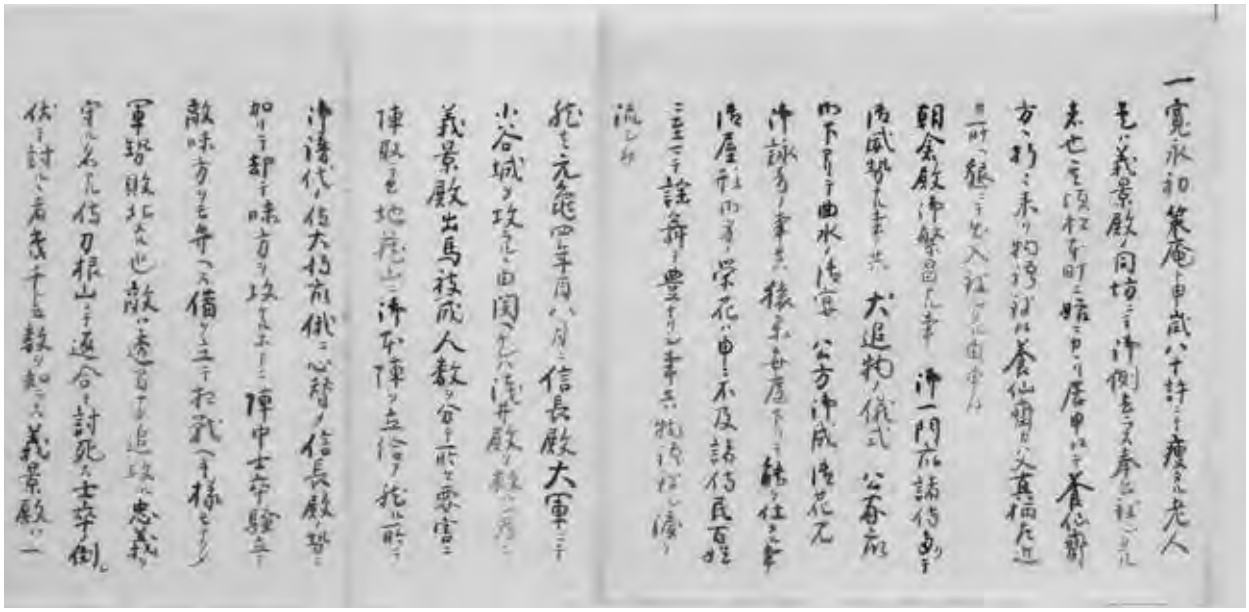
左馬助ハ数度相戦ヒ我勢散テ後只一
騎数千ノ敵中ニ馳入テ大太刀ヲ持テ截テ
廻ルニ面ニ向フ者ナシ、度々防戦シ味方ヲ助テ
小谷マテ引取也、左馬助カ家子川瀬市右衛
門・野太刀持三郎兵衛等ハ逃ル敵ヲ追討ニシテ
藤川ニ到リケルカ味方ノ後軍破レテ真柄討
死ナリト人ノ云ヲ聞テ力ヲ落シ今ハ何ニカ為メトテ
持タル所ノ野太刀ノ鞘ヲ捨タリケル、扨死骸ヲ納ン
為ニ姉川ノ戦場ニ立帰テ尋ルニ敵味方ハ
知ラス、死人ハ筈ヲ乱スカ如シ、然レトモ左馬助カ
死骸ト覚シキ見ヘス、小谷ニ帰テ会ト也、
藤川ニ於テ三郎兵衛カ捨タル野太刀ノ鞘ヲ人
拾テ濃州ノ南宮ニ持行テ置ケルヲ諸人見納
シケル也、
同年秋信長殿摂州ヘ出陣アツテ三好ノ居
城野田大坂ノ門跡ヲ攻ラル、由ヲ聞、義景殿
数万騎ヲ引卒シテ攻上リ給フ、九月十九日坂
本ヲ破ル所織田九郎・森三左衛門尉打テ
出防戦フト雖モ打破リ九郎・三左衛門尉ヲ
始トシテ七百余騎討取、其ヨリ山科醍醐



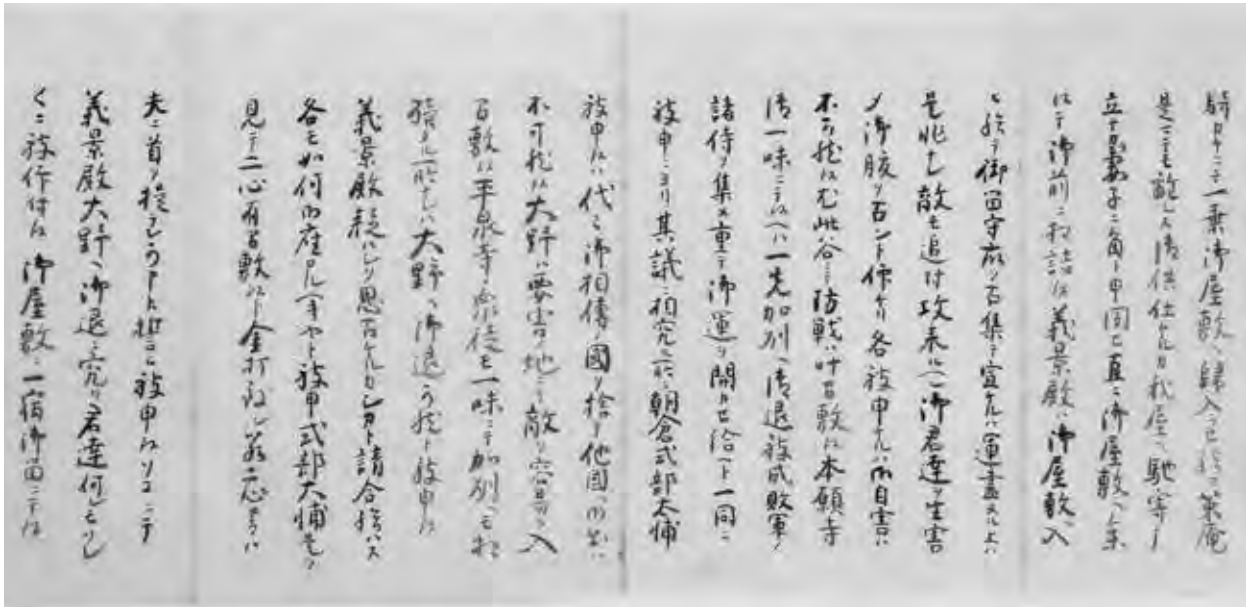
辺マテ放火ス、義景殿ハ叡山ニ陣ヲ居ヘ
信長殿ハ三井寺ニ本陣ヲ立、互ニ対陣
ニテ合戦ハ無リケル所ニ堅田ノ某心替シテ
信長殿ヘ内通シ織田甲斐守・坂井右近ヲ
大将トシテ究竟ノ兵二千人十一月廿五日ノ夜
舟ニテ潜ニ堅田ヘソ引入ケル、義景殿是ヲ
聞テ持堅メサセテハ難義ナルヘシ、急々討取レト
朝倉式部大輔已下ニ下知セラル、左馬助ハ家子
川瀬市右衛門等ヲ召連、先懸シテ押寄セ大ニ敵
陣ヲ攻破ル、左馬助自身大太刀ヲ持テ木戸ヲ
截破テ攻入ケル、敵モ遁ルヘキ道ナケレハ死ヲ
究メテ喚キ叫ンテ戦ケレトモ荒手ノ勢ヲ
入替々々揉ニ揉テ攻ケルホトニ大将甲斐守・
右近ヲ始トシテ一人モ泄サス討取ケル、敵数十人
土蔵ニ籠リ鉄炮ヲ放、手負死人甚多シ、左
馬助寄来リ大太刀ヲ以テ土蔵ヲ切崩ス、手ノ
者等折合テ悉討取ケリ、大太刀ノ手柄
天下ニ隠レナカリケリ、
信長殿先ニハ織田九郎・森三左衛門尉
已上宗徒ノ兵多討取ラレ今又堅田ニ於テ
織田甲斐守・坂井右近等究竟ノ士卒
二千人討セ摂州野田福島大坂ノ敵ハ

競起ル、且又当国ノ一揆等蜂起シテ野洲辺
ニ指出、尾濃ノ通路ヲ指塞ケレハ士卒気ヲ失、
兵粮尽ントス前ニハ大敵猛威ヲ振テ攻ントスルコト
叶ハス、退カントスルコトモ叶ハス、進退茲ニ窮リケリ、
茲ニ室町殿ヨリ上使アリ、義景・信長和睦シテ
天下ヲ守護シ万民ヲ安スヘシ、私ノ争ヲ致スヘカラス
ト也、是ハ信長殿急難ノ虎口ヲ遁レンカ為ニ
頻ニ室町殿ヲ奉頼、和睦ノアツカイヲ被申ケルト也、

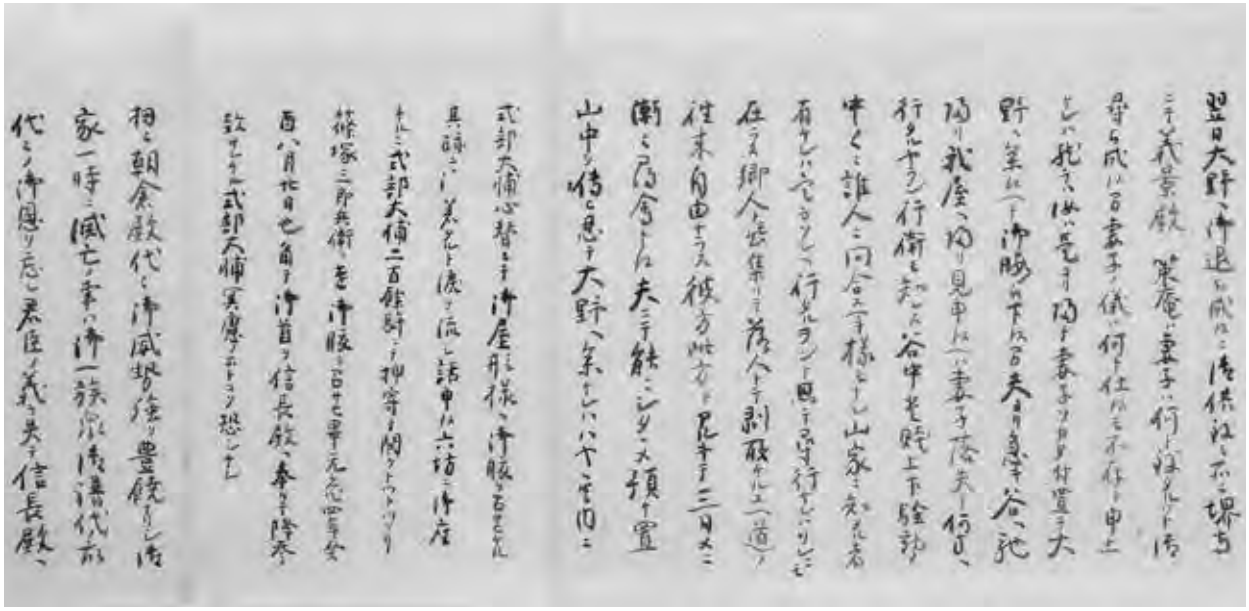
義景答被申ケルハ信長内ニ凶悪ヲ存シ外
ニ仁義ヲ飾リ表裏ノ者也、和睦ノ義御免ヲ
奉仰ト申上ラレケレハ又御門ヨリモ和睦可仕
旨勅使アリ、其上ニ信長自筆ニ已来和睦不
可有違変ト霊社ノ起請文ヲ書テ被越ケリ、
然レハ義景武命ト云王命ト云背キ難キ、其上
神文ヲ来シ候上ハ和睦仕ヘシト御請ヲ被申上
ケリ、十二月十三日信長殿・義景殿和睦シテ諸
軍喜ヲナシ両方帰国シケリ、一揆等猶勢多
辺マテモ支ル由聞ヘケレハ朝倉孫三郎ニ三百余
騎ヲ差添テ信長殿ヲ送ラシメ無恙濃州ヘ
帰城也、此度ハ大利ヲ得テ信長殿ヲ討果ス
ヘシト義景殿モ長臣共モ勇ケレトモ北国ノ悪サハ
深雪ニ山中ノ道往来自由ナラサリケレハ士卒ハ
皆進マスシテ帰国ヲ願ケルトソ聞ヘケル、



一、寛永初策庵ト申歳八十許ニテ痩タル老人
是ハ義景殿ノ同坊ニテ御側去ラス奉公致シタル
者也、其頃松本町ニ娘ニカヽリ居申候テ養仙斎
方へ折々来リ物語致候、養仙斎カ父真柄左近
カ所へ懇ニテ出入致シタル由申候、
朝倉殿御繁昌ナル事、御一門衆諸侍多クテ
御威勢ナル事共、犬追物ノ儀式、公家衆
御下アリテ曲水ノ御宴、公方御成御花見
御詠歌ノ事共、猿楽毎度下リテ能ヲ仕タル事、
御屋形御身ノ栄花ハ申ニ不及諸侍民百姓
ニ至マテ謡舞テ豊ナリシ事共、物語致シ涙ヲ
流シ候、
然者元亀四年酉八月ニ信長殿大軍ニテ
小谷城ヲ攻ラル、由聞ヘケレハ浅井殿ヲ救ハン為ニ
義景殿出馬被成人数ヲ分テ所々要害ニ
陣取ラセ地蔵山ニ御本陣ヲ立給フ、然ル所ニ
御譜代ノ侍大将衆俄ニ心替シテ信長殿ノ勢ニ
加リテ却テ味方ヲ攻ケルホトニ陣中士卒騒立テ
敵味方ヲモ弁ヘス備ヲ立テ相戦ヘキ様モナクシテ
軍勢敗北スル也、敵ハ透間ナク追攻ル、忠義ヲ
守ル名アル侍刀根山ニテ返合テ討死ス、士卒ノ倒レ
伏テ討ル、者幾千ト云数ヲ知ラス、義景殿ハ一



騎カケニテ一乗御屋敷ヘ帰入ラセ給フ、策庵
是マテモ離レス御供仕ケルカ我屋ヘ馳寄テ
立ナカラ妻子ニ角ト申聞セ直ニ御屋敷ヘ参
候テ御前ニ相詰候、義景殿ハ御屋敷ヘ入
セ給テ御留守衆ヲ召集テ宣ケルハ運尽ヌル上ハ
是非ナシ、敵モ追付攻来ルヘシ、御君達ヲ生害
シテ御腹ヲ召ント仰ケリ、各被申ケルハ御自害ハ
不可然候、尤此谷ニテ防戦ハ叶間敷候、本願寺
御一味ニテ候ヘハ一先加州ヘ御退被成、敗軍ノ
諸侍ヲ集メ重テ御運ヲ開カセ給ヘト一同ニ
被申ニヨリ其議ニ相究ル所ニ朝倉式部太輔
被申候ハ代々御相伝ノ国ヲ捨テ他国ヘ御出ハ
不可然候、大野ハ要害ノ地ニテ敵ヲ容易ク入
間敷候、平泉寺ノ衆徒モ一味ニテ加州ヘモ相
続タル所ナレハ大野ヘ御退可然ト被申候、
義景殿疑ハシク思召ケルカシカト請合給ハス、
各モ如何御座アルヘキヤト被申、式部太輔是ヲ
見テ二心有間敷候ト金打致シ若二心アラハ
夫ニ首ヲ提ラレ可申ト誓ヒ被申候、ソコニテ
義景殿大野ヘ御退ニ究リ君達何レモソレ
〳〵ニ被仰付候、御屋敷ニ一宿御留ニテ候、

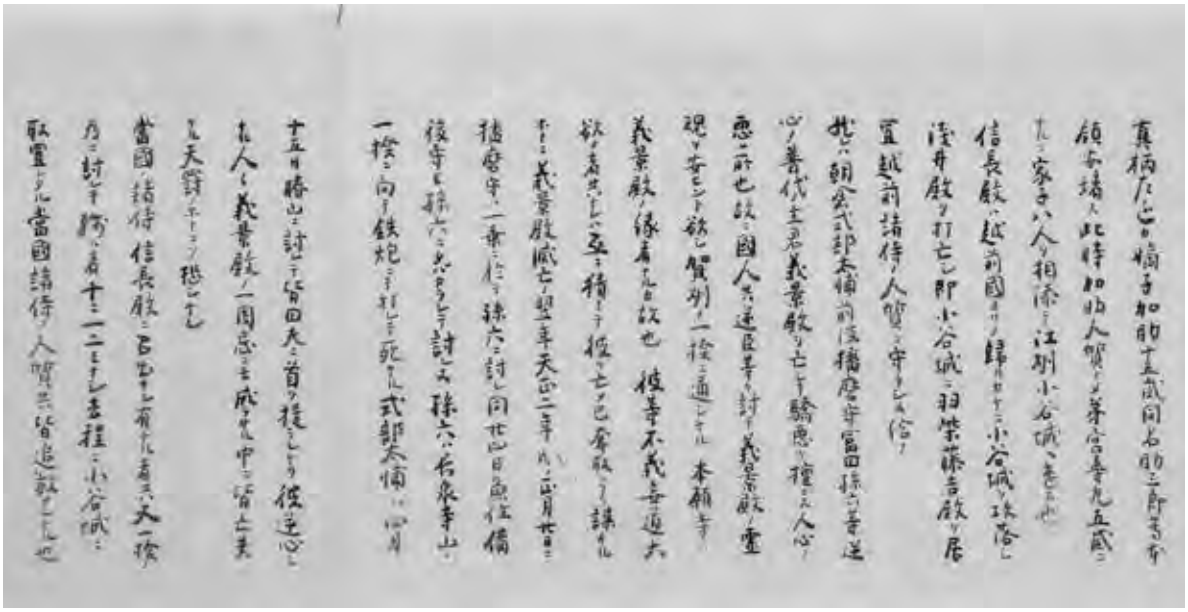


翌日大野へ御退被成候ニ御供致候所ニ堺寺
ニテ義景殿策庵ハ妻子ハ何ト致タルソト御
尋被成候間、妻子ノ儀ハ何ト仕候モ不存ト申上
ケレハ、然ラハ汝ハ是ヨリ帰テ妻子ヲカタ付置テ大
野へ参候へト御暇被下候間、夫ヨリ急キ谷へ馳
帰リ我屋へ帰リ見申候へハ妻子落失テ何方へ
行タルヤラン行衛モ知レス、谷中貴賤上下騒動シテ
中々ニ誰人ニ問合スヘキ様モナシ、山家ニ知タル者
有ケレハ定而ソレへ行タルラント思テ尋行ケレハソレニモ
在ラス、郷人トモ出集リテ落人トテ剥取ケルユヘ道ノ
往来自由ナラス、彼方此方トアルキテ三日メニ
漸々尋会申候、夫ニテ能々シタヽメ預ケ置、
山中ヲ伝ヒ忍テ大野へ参ケレハハヤ其内ニ
式部大輔心替ニテ御屋形様へ御腹ヲ召サセケル、
其跡ニ□着タルト涙ヲ流シ話申候、六坊ニ御座
ケルニ式部大輔二百余騎ニテ押寄テ関ヲトツトツクリ
篠塚三郎兵衛ヲ遣、御腹ヲ召サセ畢、元亀四年癸
酉八月廿日也、角テ御首ヲ信長殿へ奉リテ降参
致サレケル、式部大輔冥慮ノホトコソ恐レケレ、
扨々朝倉殿代々御威勢強ク豊饒ナリシ御
家一時ニ滅亡ノ事ハ御一族衆御譜代ノ衆
代々ノ御恩ヲ忘レ君臣ノ義ヲ失テ信長殿へ

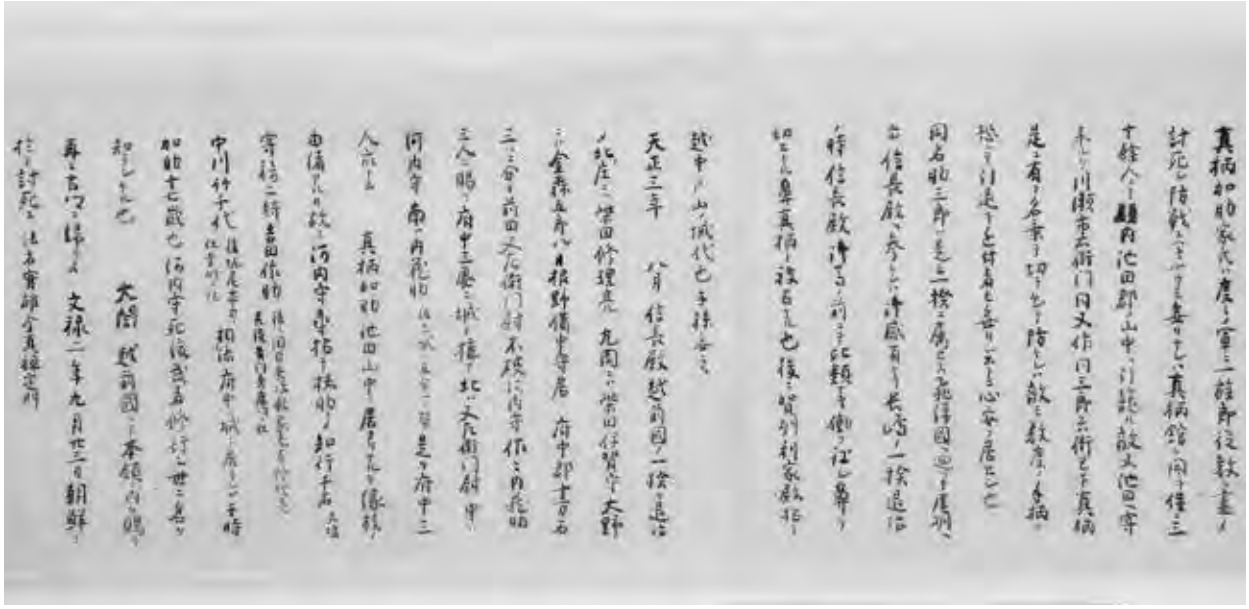
内通シ逆心致ケル故也、然レトモ因果天罰
遁レ難シテ彼者共互ニ討ツ討レツシテ悉ク
田夫ニ首を提ラレ死骸ヲ路頭ニ曝シ候、憎
マヌ人ナク浅間敷カリツル有様ニテ候ケルト策庵
涙ヲ流シ話申伝、此時策庵廿七歳ニテ有タリト申候、

義景殿ハ英林当国ヲ平均ニ治メ給テヨリ
子春・天沢・大岫マテ代々勲功ノ国ヲ受続給ヒ
其身富貴ナルニヨリテ栄花ニ誇リ心高慢ニシテ我
意ニ任セ政道正カラス、臣下ヲ侮リ諫ヲモ聞入
給ハヌニヨリ一門譜代ノ人々モ恨ヲ含テ有ケレハ
信長殿ノ威勢盛ニナルヲ見テ逆心致シ
信長殿ニ馳付テ却義景殿ヲ討、朝倉家
滅亡シ給候、嗚呼朝倉殿ヲ亡ス者ハ朝倉殿
也、信長殿ニハアラス、盛者必衰ノ理ナラン、
寛永ノ初ニテ一乗ノ繁昌ニ居タル老人トモ寄合
テハ互ニ昔ヲ相語リテ涙ヲ流シ悲ミケル、

信長殿ハ府中龍門寺ニ本陣ヲ居、国中ノ仕置
シ給フ、朝倉式部太輔ヲハ大野ニ置、前波九郎兵衛
ヲハ播磨守ニナシテ一乗ニ置、富田孫六郎ヲ府中ニ
置、此時敗軍ニ死残タル諸侍ハ深山ニ隠レテソ居
タリケル、其中ニ名アル侍討死ノ子孫ヲ召出テ本領ニ安堵せ
シメラル、

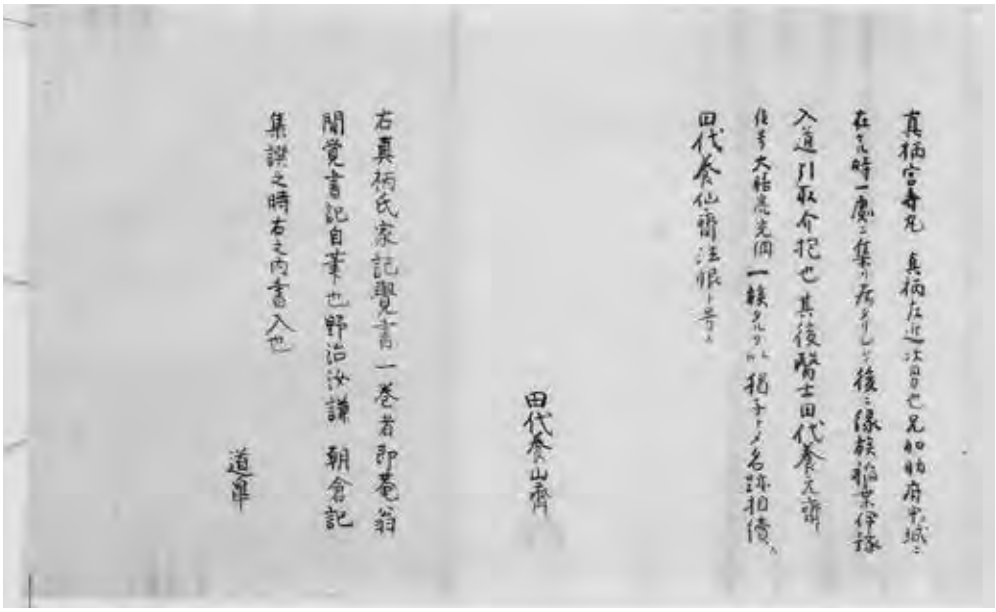


真柄左近カ嫡子加助十五歳・同名助三郎等本
領安堵ス、此時加助人質トシテ弟宮寿丸五歳ニ
ナルニ家子八人ヲ相添テ江州小谷城ヘ遣ス也、
信長殿ハ越前国ヨリノ帰リカケニ小谷城ヲ攻落シ
浅井殿ヲ打亡シ即小谷城ニ羽柴藤吉殿ヲ居
置、越前諸侍ノ人質ヲ守ラシメ給フ、
然レハ朝倉式部太輔・前波播磨守・富田孫六等逆
心シテ譜代ノ主君義景殿ヲ亡シテ驕悪ヲ擅ニス、人心ノ
悪ム所也、故ニ国人共逆臣等ヲ討テ義景殿ノ霊
魂ヲ安セント欲シ賀州ノ一揆ニ通シケル、本願寺ハ
義景殿ノ縁者ナルカ故也、彼等不義無道大
欲ノ者共ナレハ互ニ猜ミテ彼ヲ亡シテ己奪取ンコトヲ謀ケル
ホトニ義景殿滅亡ノ翌年天正二年戊ノ正月廿日ニ
播磨守ハ一乗ニ於テ孫六ニ討レ同廿四日魚住備
後守モ孫六ニタバカラレテ討レ又孫六ハ長泉寺山ノ
一揆ニ向テ鉄炮ニテ打レテ死ナル、式部太輔ハ四月
十五日勝山ニ討レテ皆田夫ニ首を提ラレケリ、彼逆心シ
ケル人々義景殿ノ一周忌ニモ成ラサル中ニ皆亡失
ケル天罰ノホトコソ恐レケレ、
当国ノ諸侍信長殿ニ召出サレ有ケル者共又一揆ノ
為ニ討レテ残ル者十ニ一二モナシ、去程ニ小谷城ニ
取置レタル当国諸侍ノ人質共皆追放サレケル也、



真柄加助家氏ハ度々ノ軍ニ一族郎従数ヲ尽シテ
討死シ防戦スヘキヤウモ無リケレハ真柄館ヲ開キ僅ニ三
十余人ニテ領内池田郡ノ山中ヘ引籠ル、敵又池田ヘ寄
来ルヲ川瀬市右衛門・同又作・同三郎兵衛已下真柄
是ニ有ト名乗テ切テ出テ防ケレハ敵モ数度ノ手柄ニ
恐レテ引退キ近付者モ無リシホトニ心安ク居セシ也、
同名助三郎ハ是モ一揆ニ属セス、飛騨国ヘ廻リテ尾州ヘ
出、信長殿ヘ参ケレハ御感有ケリ、長島ノ一揆退治
ノ時信長殿御馬ノ前ニテ比類ナキ働ヲ致シ鼻ヲ
切セケル、鼻真柄ト被召ケル也、後ニ賀州利家殿招テ

越中戸山ノ城代也、子孫無之、
天正三年八月信長殿越前国ノ一揆ヲ退治
シテ北ノ庄ニハ柴田修理亮、丸岡ニハ柴田伊賀守、大野
ニハ金森五郎八・日根野備中守居、府中郡十万石
三ツニ分チ前田又左衛門尉・不破河内守・佐々内蔵助
三人ニ賜リ府中三処ニ城ヲ構フ、北ハ又左衛門尉、中ハ
河内守、南ハ内蔵助後ニハ城ヲ五分一ニ築是を府中三
人衆ト云、真柄加助池田山中ニ居タリケルヲ縁族ノ
由緒アルカ故ニ河内守尋招テ扶助トシテ知行千石大塩
寄騎二騎吉田作助後ニ関白秀次殿家老、号修理亮、其後黄門秀康卿ニ仕・
中川竹千代後堀尾帯刀ニ仕、雲州ニ住相添、府中ノ城ニ居ラシム、于時
加助十七歳也、河内守死後武者修行シ世ニ名ヲ
知ラレケル也、大閤越前国ニテ本領ノ内ヲ賜リ
再ヒ古郷ニ帰リヌ、文禄二年九月廿三日朝鮮ニ
於テ討死ス法名実雄全真禅定門、



真柄宮寿丸真柄左近次男也兄加助府中ノ城ニ
在ケル時一処ニ集リ居タリシヲ後ニ縁族稲葉伊予
入道引取介抱也、其後医士田代養元斎
後号大膳亮光綱一族タルヲ以猶子トシテ名跡相続ス、
田代養仙斎法眼ト号ス、

田代養山斎（黒印）

右真柄氏家記覚書一巻者即庵翁
聞覚書記自筆也、野治汝謙朝倉記
集譔之時右之内書入也、

道皐

＊なお、本文中に見える返り点などは省略した。

福井県立歴史博物館紀要
特 別 号
令和４年３月10日発行
発行　福井県立歴史博物館
Fukui Prefectural Museum of Cultural History
〒910-0016　福井市大宮2-19-15
TEL 0776-22-4675・FAX 0776-22-4694
E-mail history-museum@pref.fukui.lg.jp
2-19-15 Ohmiya, FUKUI-city 910-0016
印刷　足羽印刷株式会社